

ENCOUNTER

出会いの広場 No.15 1992. 9

特集・わが国における来談者中心療法の 発展と評価

● 特集・わが国における来談者中心療法の発展と評価

- 来談者中心療法の発展と評価……………畠瀬 直子
私にとってのロジャーズ……………野島 一彦
私の中の来談者中心療法……………小柳 晴生
PCAワークショップ'83……………伊藤 義美

● ボディ・ワークが自己身体イメージに及ぼす影響…矢幡 洋

● 出会い百選(2)

- 『童は「ふざけ」に本質あり……平井信義さん』…畠瀬 直子

● 海外リポート

- I.T.P.での1学期……………高尾 浩

● 連載・最終回

- 嵐のエンカウンター……………団 士郎

● 書評

- 石原文里著『こころは生きている』……………鈴木 正子

● おしらせ・情報・あれこれ

目次

ENCOUNTER 出会いの広場

No.15



■特集・わが国における来談者中心療法の発展と評価

《日本人間性心理学会第十回大会、自主企画シンポジウム報告》

来談者中心療法の発展と評価…………… 畠瀬 直子

私にとってのロジャーズ…………… 野島 一彦

私の中の来談者中心療法…………… 小柳 晴生

P C Aワークショップ'83…………… 伊藤 義美

討議部分発言要旨…………… (木村 易)

■ボデイ・ワークが自己身体イメージに及ぼす影響…………… 矢幡 洋

■出会い百選⁽¹²⁾

『童は「ふざけ」に本質あり…………… 平井信義さん』…………… 畠瀬 直子

■海外リポート

I・T・P・での一学期…………… 高尾 浩

■連載・最終回

嵐のエンカウンター・グループ…………… 団 士郎

■書評・石原文里著『こころは生きている』…………… 鈴木 正子

■おしらせ・情報・あれこれ

《日本人間性心理学会第十回大会、自主企画シンポジウム報告》

特集

わが国における来談者中心療法の発展と評価

● 来談者中心療法の発展と評価

畠 瀬 直 子

一、非指示パラダイムの非権威性

二十世紀が終わろうとする今、ロジャーズ理論を冷静に眺めると、それが極めて新しいパラダイムの提示だったことが分かる。「虎は死して皮を残す。人は死して名を残す。」人間が、男が、生きる目的としてきたとも言えるパラダイムに別れを告げる理論の出現だったと言えるからである。私自身は、ロジャーズのそばで学んでいた時、「ロジャーズ理論を守るのではなく、直子理論を持つのが臨床心理学者の道だ」という考え方の中で心細さが大きかった。今になって、アカデミズムの歴史が新しいパラダイムで蘇生する意味に気づいて

いるのが正直なところである。

世界の流れからは孤立ぎみに歩んできたわが国も、いよいよ日本特有の親分子分の人間関係を脱つせざるを得ない地点に立たされている。その新しい人間関係を求める模索の中で「カウンセリング・マインドが必要だ」という声を色々な所で聞く。案外、聡明なこの国の人々は深い次元でロジャーズ理論の非権威性を吸収したのかも知れないと思う。何げないひとつひとつの発言に、人間を切り捨てないで無条件に暖かく受容するところから始めてみたいとの願いが込められているのをひしひしと感じることが多いからである。しかし、それは「発展と評価」という切口からは発展として評価していいのかどうか疑問である。

二、共感という概念との出会い、吸収

「EmpathyとSympathyは違う概念なんだ！」こんなことが、私大学院生の頃まじめに語られていた。(一九六〇年代中ごろ)当時、臨床心理学講座があるのは、国立大学では東大と京大だけで、私達の指導者は、外国文献を通して私達を指導していた。実践から学ぶのは自分達自身の体験が頼りだった。ひとつひとつの概念を吸収して体験の中でとらえ展開させていくのは一大事業だった。共感を同情から引き離す必要さえあったのである。ところが今、テレビの討論シーンなどで「共感が大切なんですよね」などという表現が、何の違和感もなく一般の人の口からこぼれだす。こういうシーンを見ると、日本人が内面的にも変化を重ねてきたことがわかる。

『人間の精神活動の中で、目的に縛られず、ゆえに意識を通した連結によって偏向されないもの、〈智〉の卓越が見られるものは何か。

もっとも重要なものとして「愛」を挙げなくてはなるまい。ここでマルティン・ブーバーが行った人間関係の分類が、われわれの議論とかみ合ってくる。彼は、〈我と汝〉の関係を〈我とそれ〉の関係と区別し、後者を人間と無生物との間で特徴的に見られるものと規定したうえで、人間同士でも、愛より目的が重要であるときには〈我とそれ〉の関係が現れることを指摘した。それならば、人間——社会間、人間——生態系間にも〈我と汝〉の関係が成り立ちうるのではあるまいか。複雑なサイバネティクス構造を持つ社会やエコシステムが、生あるものと感じられるかぎりにおいて、愛による結びつきは理論的にも可能なはずである。この点、目的遂行組織の内部に、一種の「感情訓練グループ」が形成される現象は興味深い。』

注 G. Batesonの一九六七年の指摘であるが、わが国においてもカ

ウンセリング的にかかわりを模索しながら、自由な精神と智の卓越を実感レベルで掘り下げつつあると言っているのではないだろうか。情に揺すぶられるとりとめのない人間から、情を〈智の卓越〉によって人間の内的豊かさに役立て得る全人への道を捜しているのではないだろうか。そして、エンカウンター・グループの実践も、人間関係を〈それ化〉させない何等かの力になりえてきたのではないだろうか。

心理学は、その学問の性格上、学問の世界を越えて人々の暮らしに非常に大きな影響を与える。さまざまな人から「カウンセリング・マインドって、大切ですよね。」と同意を求められるたびに、ロジャーズ理論がこの国の風土の一部になっているのを感じる。一般の人々から、心理治療とか精神分析とかいう言葉を聞く事はほとんどないので、感慨ぶかいものがある。

三、自・他・私・自由意志の獲得が少しずつ進んできた今

来談者中心療法は主体的自己が意識されている個人と個人の関係で成り立つものである。今という時点で戦後の歩みを振り返ると、民主主義を知的観念的に取り入れつつ、主体的自己の獲得をはかりつつ、同時に来談者中心療法を日本の隅々で展開したことになる。先人達の苦労がいかに大きかったか改めて痛感する。しかし、『カウンセリング』あるいは『カウンセリング・マインド』という言葉が、にくしみの響きを持ってないということは、先人達の苦労の成果なのではないだろうか。

私は日本のロジリアンと自称する人々に奇妙な人々という印象を抱いてきた。シンポジウムでこの点について質問を受けて自分に明白に見えてきたのは、カウンセラーが自分からは動かない点である。かたくなに、いこじと言えほど動こうとはしない。それが、

カウンセリング・ワークショップで自分を磨いてきた人々に対する私の印象だった。これでは、クライアントがカウンセリングが嫌にならないかと心配したほどである。けれども、私の心配など関わりないと言わんばかりに、我は我が道を行くのがロジャリアンの信念に見えた。

のびやかなアメリカのロジャリアンと接した私には奇妙に見えたが、自発性獲得という課題は、私達日本人には、それぐらいに困難な課題だったと言えるのかも知れない。はたして私達がどの時点まで歩みだしてるのか判断は難しいが、敗戦前後の農村の様子をこまやかに描いた、きだみの『氣違い部落周遊紀行』などを読むと、日本も本当に変わったと思う。あらゆる人間を「人格」を持った存在と感じて彼の内奥からの声を尊重することのほうが、自分の意見に自分の意見をぶつけることなど信じられないという感じ方より自然になっている。年長者が大声で熱演すると、若者が自説を論じにくい空気は残っているものの、それが許される時代であることを疑う人はいないだろう。

四、来談者中心療法にとって苦悩であった、長い、ぎこちない、あと口の悪い沈黙

これも時代とともに消滅するであろう、忘れてはならない率直な現実であった。「自己啓発」と称する可能性開発をうたった新しい職業の人々が、集団催眠のテクニックを使ったかのような自己開示体験を売りものにしてている。エンカウンター・グループで生じる長い、ぎこちない、あと口の悪い沈黙を思い出すと、「あっ、やられたな」と思う。自己を解放して自由に人々と向き合い、語り合いたいという若者達の内奥の叫びを知っているからである。それを達成する前に生じる沈黙が、若者に耐えがたいのが分かるからである。人

間関係を「我とそれ」として捉える人なら、インスタント自己解放を商売にしてもおかしくはないだろう。

先の記述と矛盾するようだが、ぎこちない沈黙は、まだまだ続くだろうし、これこそ今の日本人の心性、率直な現実である。ベイトソン流にいうなら、ロジャーズの流れをくむ人々は、人間と社会が「我と汝」の関係となるために存在をさらして訓練していると言え。ぎこちない沈黙の中にあっても、「それ化」しないように戦っていることになる。

ただ、私はロジャーズの名を声高くいうことが彼の願いに答えることになるとは思わないので、ロジャーズ理論の発展などという捉え方はもうそろそろ終わりにしたいと考えている。ロジャーズの直弟子達がスタートした国際会議も、九十四年に開かれる第三回のウィーン会議からロジャーズ派という壁を取り、すべての実践研究家に解放するそうである。エネルギーの続く限りそれらの会議に出席し続け、人間性心理学会のみなさんに報告したいと願っている。

五、二十一世紀と地球人としての歩み

シンポジウムでの討論からは逸脱するが、いまから力をつけようとする若い会員に伝えたいことがある。

日本人といわれる人間のほとんどは、飽きもせず小さなこの島に（先日、留学生に「日本は小さな島じゃない」と指摘されたが……）一万年以上も住み続けているらしい。地球人のほとんどは、大陸育ちなので日本人はマイノリティーもいいところである。「国際親善に役立ちたい」などと、小学生のような純真さで国際会議に出ていくと気が狂いそうになる。

日本人は日本人であるということに劣等感を感じたことがない特殊性がある。さらに、東洋の文化にたいして劣等感を感じたことが

ない。西洋の食習慣のほうが東洋の食習慣より優れているとも思わないので、油っこさにへきえきすると日本料理店に、堂々と駆け込む。おどおどして西洋風を取り入れるのが当り前と考える先進国意識の強い人間から見ると、傲慢で鼻もちならない人種のようにである。私は自分の内面をみつめて、「これじゃ、足音荒く国際連盟の議場を飛び出した、過去の日本人と同じだわ」と慌てることが多い。

この点、自分の前にやってきた人を無条件に肯定的に受容する訓練を重ねてきたロジャーズを学んだ人々は、先進文明人意識が強

かったとしても、ともかく相手を深く理解したいという態度をしつかり刻んでいるので、人間同士として向き合いやすい。私達は、歴史の責任上からも、西洋と東洋の架け橋にならなければならないので、受容を刻んだ臨床心理学者と向き合いながら国際性を磨き、二十一世紀に向かって精進していくのが有効な道と思えてならない。

注) G・ベイトソン『精神の生態学』思索社、六四二p、一九八七年

はたせなおこ
●滋賀大学保健管理センター

●私にとってのロジャーズ

野 島 一 彦

一、ロジャーズとの出会いの経緯

まず私とロジャーズとの出会いの経緯について、おおまかに述べたい。私の大学生の時代（一九六六～一九七〇年）は、世界的にも国内的にも学生運動が活発な時代であったが、その時期に伊東博先生の『新訂・カウンセリング』（一九六六）を読み、非常に感動した。当時は権力に対する反発・反抗ということをいろいろ考えてい

た時代であったので、特にその中で紹介されていたロジャーズの間観に非常に感動した。

やがて一九七〇年になって、村山正治先生と知り合うことになった。きっかけは、私が学んでいた九州大学教育学部のカウンセリング講座の前田重治先生（精神分析が専門）に、「私はロジャーズが好きである」とお話ししたら、教養部におられた村山正治先生を紹介されたのである。以後、村山先生に話をお聞きしたり、カウンセリングの研究会に出るようになり、ロジャーズのことを学ぶことになっ

た。

その時、とても印象的であったのは、村山先生のカウンセリングのテープを聞かせてもらったが、先生はフランクにアクティブにどんどん発言しておられて、それまでの友田不二男先生の本（一九五六）、伊東先生の本から受けていた（独特の感じの）カウンセラーのイメージとは全然違うなということであった。これはある意味でショックでもあった。

その後大学院生であった一九七四年の夏に、カリフォルニア大学サン・ディエゴ校で開催された「クライエント・センタード・アプローチ・ワークショップ」、「ラ・ホイア・プログラム」（共に十七日間）で、私は初めて直接彼と出会うことになった。お会いしてみて、安定したどっしりした農夫のイメージの方だなあと考えた。また、それまで彼はとても偉い人で近付きがたい人と勝手に思っていたが、目の前にすると、身近で近付きやすい人だなあと印象も受けた。

それから一九八三年春に、彼を日本に招いてのワークショップ（人間関係研究会主催、国立婦人教育会館）で、九年ぶりに再会することになった。そこで私が強く感じたのは、「このワークショップの記録『カール・ロジャーズとともに』（一九八六）にも書いたが」次の三つであった。第一は、ロジャーズ（当時八十一歳）は絶えず、積極的に、成長し続ける人であり、ご本人自身が「人間は成長し続ける」という彼の考えの生きたモデルだなあと考えた。第二は、よく言われるカウンセリングの三つの条件（純粋さ、無条件の肯定的関心、共感的理解）を体現している人だなあと考えた。第三は、いろいろな話したり書いたりされることと、日頃自分が実践していることが一致、一貫している人だなあと考えた。

*

二、ロジャーズから私が受けた影響

次にロジャーズから私が受けた影響について述べよう。

第一は人間観であるが、特に「成長力への信頼」ということは、臨床家としても、人間としても、私の非常に大きなベースになっている。

第二は人間関係のあり方（人間関係論）について、「いわゆる三条件」は、カウンセリングはもちろん、親子関係なり夫婦関係なり、あるいは広く人間集団におけるグラウンド・セオリーみたいなベリックなものであると感じている。

第三は研究方法について、彼の次のような研究の進め方は、私もそうありたいと思っている。①実践のテープ録音・逐語録をもとに現象そのものを直視してじっくり観察する。②臨床だけをやっていると唯我独尊的になっていく危険があるが、彼は絶えずリサーチ（実証的研究）を積極的に実施して、自分の考えをチェックしている。③彼の理論は、（例えば精神分析の複雑怪奇な理論に比べるとシンプルすぎるくらいであるけれども）足が地についた理論化、現実から大きく離れすぎない理論化をしている。④彼は、実践・リサーチ・理論の三つのバランスが非常によくとれている。

第四は研究・実践を進展させていくことについて、その姿勢に学びたいと思う。つまりアプローチの仕方については、個人療法→小グループ→大グループという形で彼は関心を広げている。カウンセリングの対象については、子どもやその親↓学生相談↓分裂病者ということで手を広げている。エンカウンター・グループの適用については、一般人↓教育↓人種問題・宗教問題・国家間の緊張の社会問題等と拡大している。このように一箇所に留まらず、どんどん広がっていくところがいいなと思う。

第五は自分の人間性とプロフェッショナルな専門性の統合につい

て、彼はそれらをうまく違和感なく一致させ調和させておられるが、そういうところがいいなあと思う。私の回りでは、専門性ではとても優れておられるけれども、人間性はどうもという方がおられるが、彼はそうではなく、彼は両方とも尊敬できる。

三、私からみたロジャーズの評価

私からみたロジャーズの評価を、個人心理療法とグループの両方を行っている立場から、それぞれについて述べよう。

a、個人心理療法

最初に私自身の個人心理療法に携わってきた実践領域について簡単に述べると、九州大学教育学部心理教育相談室、二つの大学の学生相談室、心療内科、精神科（入院施設、外来クリニック）、プレイベート・プラクティスという形で、約二〇年くらいやってきている。それらの諸領域における長年の個人心理療法の実践をとおして、基本的にはロジャーズの人間観、人間関係論は有効だと思う。

しかし、自我の障害のレベルが重くなるほど（例えば、境界例、精神分裂病等）、相手の理解のために、精神分析的な見方・考え方や理解の仕方が私の支えになり、これがひいては私自身の心理的安定のために役立っている。

ちなみに、ロジャーズ達の精神分裂病治療の実践・研究については、膨大なリポート（ロジャーズ全集別巻第一〜三集、一九七二）があるが、実は私はそれらをあまり勉強していない。だから、この方面に関しては、彼の影響は殆ど受けていないと言える。

また、自我の障害のレベルが重くなるほど、私はかなりサポートティブな形の関わり方をすることが多いなと自覚している。

それから来談者中心療法は自己表現・自己開示促進的な方向性が

あるが、自我の障害のレベルが重くなると、それは危険な場合があると思う。特に神田橋條治先生の自閉の利用というアプローチがあるが、そのようなことと照らし合わせてそんな感じがする。

ところで、この頃注目されている人格障害のクライエントには、私が外界の認知の仕方の多様性を、積極的に言葉で説明したりして関わるのがかなり多いなと自覚している。

b、グループ

まず私自身のグループ実践の概略を述べると、一般人・教師・学生等とのエンカウンター・グループを、約二〇年間やってきている。またもう一つは、精神病院のデイケアにおける心理ミーティング（そこに参加している患者の殆どは精神分裂病患者）を、毎週一回ここ四年半続けてきている。これについては野島（一九九二）に詳しくまとめている。

これらの実践の体験をとおして、基本的にはロジャーズのグループ観、プロセス論、ファシリテーター論は有効だと思う。

ただグループ観として、グループのパワーは多くの場合は肯定的に働くことが多いが、時と場合によっては破壊的に働くこともあるなあと思う。つまりグループは人間を育てるとともに、一歩間違うと人間を壊すことがあると思う。

それからプロセス論としては、ロジャーズはエンカウンター・グループの本（一九八二）の中で、十五に分けて記述（模索、個人的表現または探求に対する抵抗、過去感情の述懐、否定的感情の表明、個人的に意味のある事柄の表明と探求、グループ内における瞬時的対人感情の表明、グループ内の治癒力の発展、自己受容と変化の芽ばえ、仮面の剥奪、フィードバック、対決、グループ・セッション外での援助的関係の出現、基本的出会い、肯定的感情と親密さの表明、グループ内での行動の変化）している。

しかしこれよりは、村山・野島（一九七七）の発展段階仮説（段階Ⅰ…当惑・模索、段階Ⅱ…グループの目的・同一性の模索、段階Ⅲ…否定的感情の表明、段階Ⅳ…相互信頼の発展、段階Ⅴ…親密感の確立、段階Ⅵ…深い相互関係と自己直面、終結段階）、野島（一九八二）のグループ・プロセス論（導入期、展開期、終結期）、野島（一九八三）の個人プロセス論（「主体的・創造的探索」過程、「開放的態度形成」過程、「自己理解・受容」過程、「他者援助」過程、「人間理解深化・拡大」過程、「人間関係親密化」過程）の方が、もっとはっきりと明快に記述しているのではないかなという感じがする。

ファシリテーター論についても、彼の本（一九八二）の中で彼の考えを述べているが、わが国では多くのファシリテーターが自分なりのファシリテーター論を展開してきており（例えば、保坂（一九八三）、岩村（一九九〇）等）、ロジャーズから脱却しつつあるのではなからうかと思う。

ところで、私がファシリテーターをしていて、時と場合によるが、精神分析的な見方・考え方が役立っていることがある。ちなみに、精神分析については、実は私は前田先生の研究会で個人カウンセリングの勉強をずっとしてきたので、好むと好まざるにかかわらず、精神分析的な見方・考え方が身にしみついているところがある。

さて、エンカウンター・グループと心理ミーティングの二つをやってみての違いは、後者ではかなり私は氣を使ってサポータータイプにしているし、リード的であるし、さらに話させ過ぎないように注意しながら関わっているなと思う。

最後に、エンカウンター・グループはわが国でもいろいろ適用されてきているが、今後もっと適用していいのではないかと思う。例えば、老人問題、ターミナル・ケアにある人への援助とか、あるいはロジャーズが取り組んだ平和問題等である。実際にそのようなところに適用できるだけのパワフルな可能性を、私は強く感じる。

だから彼がエンカウンター・グループなり集中的グループ経験について、「今世紀最大の社会的発明」という言い方をしているが、これは決しておおげさでなく、まさにそうだなと思う。グループは二十一世紀にむけて、きわめて有効アプローチだなとつくづく思う。

引用文献

- 島瀬直子他編『カール・ロジャーズとともに』創元社、一九八六年
保坂亨「エンカウンター・グループにおけるファシリテーターの問題について」、心理臨床学研究、第一巻第一号 一九八三年
岩村聡「あたたかいグループへのファシリテーション」、ENCOUNTER 出会いの広場、第一一号 一九九〇年
伊東博「新訂・カウンセリング」誠信書房、一九六六年
村山正治・野島一彦「エンカウンターグループ・プロセスの発展段階」、九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）、第二一巻第二号 一九七七年
野島一彦「エンカウンター・グループ・プロセス論」、福岡大学人文論叢、第一三巻第四号 一九八二年
野島一彦「エンカウンター・グループにおける個人過程——概念化の試み」、福岡大学人文論叢、第一五巻第一号 一九八三年
野島一彦他「デイケアにおける『心理ミーティング』導入の試み」、集団精神療法、第七巻第一号 一九九一年
ロジャーズ全集別巻第一〜三集『サイコセラピーの研究——分裂病へのアプローチ』岩崎学術出版社、一九七二年
ロジャーズ、C・R・著、島瀬稔・島瀬直子訳『エンカウンター・グループ』創元社、一九八二年
友田不二男『カウンセリングの技術』誠信書房、一九五六年

●私の中の来談者中心療法

小柳 晴 生

一、来談者中心療法との出会い小史

～イデオロギーから脱イデオロギーへ～

小学校の時（昭和三十一年（一九五六）～三十六（一九六一））、年を超えて生徒に慕われている「伊藤正美先生」という先生がいた。自然で企みがなく話かけやすい先生だった。大学に入ってから地方の心理学会の論文集に、伊藤先生のカウンセリングに関する発表を見つけた時、この先生が慕われていた理由に納得がいった気がした。

田舎の牧歌的環境のせいもあったのだろうが、小学校の雰囲気も伊藤先生の特性を発揮しやすいようなものだった。今だったら養護学校や促進学級に通っているだろうと思われる子が、クラスには何人かはいたし、経済的にかなり困窮していることが子供の目にも明らかにわかる子も含まれていた。「仲よくしなさい」と押し付けられることはなかったが、先生方がさりげなく配慮し、その雰囲気

子供たちに伝わり、特別扱いするのではなく仲間として関わるのが当然という感じだった。この小学校での経験が、今の私のカウンセリングに血となり肉となって息づいているように思う。

中学校時代（昭和三十七（一九六二）～三十九（一九六四））は、東京オリンピック旋風が吹きあれ、強さや努力を賛美する競争主義がはびこっていた。おりから第一次ベビー・ブームの受験期と重なり、中学校にはギスギスした空気が漂い、生徒の心もすさんでいた。集会の時など、先生が大声で生徒を罵倒し、ビンタが飛ぶというのも日常茶飯事であった。靴下やスカートだけに至るまで細かな服装チェックが行われ、生徒はさながら牛馬のごとき扱いであった。内心、強い反発を感じていたが、表現する自由も機会もその強さもなく、奔弄されるままであった。小学校の雰囲気とのあまりの違いに、自分を見失ない苦しい時期であった。

高校は（昭和四十一（一九六六）～四十三（一九六八））、進学校であったが独特の自由な風土があった。カウンセラー制度も整って

おり、かなりの歴史もあった。残念ながら私自身は、精神的にかなり調子を崩していたにもかかわらず、偏見やプライドのためにカウンセリングを受けることなく卒業した。それでも、この高校の自由な風土のいくばくかは、カウンセリングと関係があると感じた。ちなみに、この高校の卒業生は、援助的な職業に関わる人が多く輩出されているように思う。

相談活動の中心となっていた「北島（現在関）丕先生」はアメリカ留学中で、在学中は知りあう機会がなかった。北島先生はその後、石川県の教育界でカウンセリングの推進の中心的役割を果たすようになった。

大学では（昭和四十五（一九七〇）～四十八（一九七三））、三年の時「多田治夫先生」の臨床心理学の講義でロジャーズの「人格変容に必要な十分な条件」を紹介されたり、ロールプレイ、エンカウンター・グループ（E・G）を経験した。これが直接ロジャーズに触れた最初であった。当時の私は、カウンセリングに疑問を感じていたし、W・ライヒに関心があった。しかし、ロジャーズの論文には感動し何度も読み返したし、とりわけ、初回のグループ体験は、後に私がカウンセラーになってゆくことに大きな役割を果たした。

大学では、保健管理センターにおられた「福井康之先生」とも関わりがあった。当時、福井先生は、行動療法に関心を持っていたが、学生相談の分野にいち早くE・Gを取り入れている。また、教育学部の「対島忠先生」のE・Gにも出た。

二年間の大学の研究生時代（昭和四十九（一九七四）～五十（一九七五））は、将来の進路を考えたり、大学院の受験勉強に費やし、多田先生や福井先生の研究会に出席したりした。両先生とも博識で、様々な学派についてこだわりなく教えていただいた。E・Gにも六回参加している。

大学時代を振り返ってみると、情報としては来談者中心療法が多く、影響も強く受けたが、行動療法や精神分析など他の領域の知識に触れなかったわけではない。様々な情報のなかから、しだいに来談者中心療法に親近感を感じるようになっていく。知識からというよりE・Gの風土やファシリテーターをされた先生方の態度にひかれるものがあつたからであろう。とはいっても、心酔するという感じではなく、かなり批判的懐疑的関心の持ちようであったが。

大学院（昭和五十一（一九七六）～五十三（一九七八））から広島に移り、教室では精神分析、ことにE・H・エリクソンの大家である「鍾幹八郎先生」、「丸藤太郎先生」を始め、そうそうたるOB、先輩が居並んでいた。これに馴染むべく努力したが、馴染みきれなかった。うつ屈した気持で、足は保健管理センターに向かい「藤土圭三先生（現山口大学）」や、学生相談室の「小谷英文先生（現国際基督教大学）」と関わるようになった。さらに、学生相談室にいた「岩村聡先生」や、学外でカウンセリング・スクールをやっていた「下迫和子先生」とも親交を得た。教室外で親交を得た四人の先生方は、いずれも当時、主として来談者中心療法に居拠されており、わたしにも馴染みやすい雰囲気だった。学生相談室主催のE・Gにファシリテーターに登用してもらうなど、急速に来談者中心療法に接近していった。

院の博士課程後期に進学した時、自分の能力の問題や自分以上に飾って見せようとする傾向、そして教室の精神的風土と来談者中心療法の葛藤などが混然となって身動きがつかない状態になり、カウンセリングを受けざるを得なくなった。当時の私は、劣等感とプライドが交錯して、カウンセリングを受けることへの抵抗はすごいものだった。その時カウンセラーに選んだのは、来談者中心の岩村先生だった。面接を三十回弱受け、自分の未熟さに直面したり、長所を改めて見直したりした。その中で、精神分析的風土と来談者

中心療法の葛藤については「来談者中心療法寄りでやっていく」と決意している。決意したとほぼ同時に、保健管理センターへの就職が決まったが、人生の絶妙な綾を感じさせられた出来事だった。

私が自分の立場を選ぶに際して、影響を受けた人は名前を挙げただけでも十一名に上る。このうち、来談者中心の立場に立つと考えられる人は七名であった。カウンセリングが主としてアメリカを中心とする西欧から入ってきたことを考えれば当然かもしれないが、名前をあげた人のかなりが海外留学経験とキリスト教とに関係があった。

私にとっての心理療法、来談者中心療法は、西欧文化として入ってきたと言える。私にかぎらず、戦後、来談者中心療法は、西欧文化、とりわけ自由と民主主義というイデオロギーの教育版、あるいは教育相談版としての性質を強く持っていたと考えられる。さらに広く言えば、自主性や個人の尊重というヒューマニズムという理念、イデオロギーだったのではないだろうか。第二次大戦後、自由と民主主義、自主性や個人の尊重というヒューマニズムが、熱狂的に歓迎され信奉されたという文脈の中で、カウンセリングも受け入れられていったのではないだろうか。

ロジャーズが望むと望まざるとに関わらず、日本における来談者中心療法はアメリカ文化のミッション、とりわけヒューマニズム・イデオロギーの伝導者の役割を果たしていたように思われる。ただし、ここであげたどの先生も地味に仕事をされたし、決してイデオロギッシュでなかったことは強調しておきたい。

今日、イデオロギーとしてのヒューマニズムは、西欧からもたらされた他の科学や合理主義とともに疑義がさしはさまれ、やや陰りを見せている。ロジャーズがもたらした来談者中心療法が、イデオ

ロギーとしてのヒューマニズムの終えんとともに衰退していくのか、それ以上の意味を含んでおり、今後も生き残れるかという地点にさしかかっているように思う。

ところで、ヒューマニズムは、今日最も普遍的に共有されているためにイデオロギーとはわかりにくい。私の主張に疑問を感じる方も多いと思うが、この点については今後さらに議論される必要がある。

私の英語嫌いもあってか、西欧文化としての来談者中心療法にはなじめなかったきらいがある。「受容」や「共感」という言葉にひかれる一方で、翻訳された言葉への疑いを捨てきれず、自分の口から出すときにためらうものがあつた。個人史の後半に知りあつた藤土先生や岩村先生は、来談者中心療法に依拠しているとはいっても土着の人であつた。先に来談者中心療法ありきではなく、クライエントから学んでいった結果として、そこにたどり着いた印象を受けた。実際にそうであつたかどうかというよりも、私がそのように見、私自身がクライエントから学んでいって、来談者中心療法の妥当性を検討してみたいと思つたことに価値があるように思える。

このような個人史をあえて普遍化すれば、日本における来談者中心療法は、西欧文化、ヒューマニズム・イデオロギーとして入ってきたものが、脱西欧文化化、脱ヒューマニズム・イデオロギー化という変遷をたどろうとしていると考えられるのではないだろうか。

ロジャーズ自身、民主主義という枠組で自分の仕事をとらえることが多い。しかし、来談者中心療法はイデオロギーとしてのヒューマニズム以上の意味を含んでおり、それとは異なるもっと大きな枠組でしかとらえられないように思う。その枠組はいまだ全貌を表わしてはいないが、この枠組を浮び上らせることが、来談者中心療法に居拠している者に託された使命のように思われる。

二、一九八三年のロジャーズ・ワークショップでの 体験（崇拜から協働へ）

一九八三年、埼玉県嵐山にある国立婦人教育会館で一週間に渡って開かれたロジャーズ・ワークショップは、日本カウンセリング界の大家から学生まで、地域的にも日本各地から集まり、多様な結びつきが生まれるよう配慮されていた。

私は、ワークショップで「いま、ここでの、参加者同志の出会いも、ロジャーズとの出会いと同様の重みがあり大切にしたい」と主張した。しかし、ロジャーズから学ぶこと、ロジャーズと会うことを期待していた人達との間で、かなりのそごが生じたように思う。私の主張するところの意味すら十分伝わらず、若い人達のスタンドライ的な反逆という受け止め方さえされた。この出来事は、結局ワークショップのなかでは明確な確執として表面されることはなかったが、「崇拜派ないしは信奉派對協働派」ともいべき対立だったのではないだろうか。この現象は、日本のロジャーズに対する姿勢を象徴的に表わしているように思われた。

このワークショップを記録した『カール・ロジャーズとともに』では、「ロジャーズ中心の進め方」や「自由に接することを制限された」ことへの不満（二十一、二十七頁）と表記されているが、真意が十分に伝わっているとはいえない。私が、伝えたかったのは、「大切なことはロジャーズに盲従することではなく、それぞれが自分なりの道を行って、その結果が同じ『質』のものであれたい」ということだった。

あれから八年、このワークショップで生まれたつながりは、ロジャーズの日本での遺産として、確実に育っていると思う。ちなみに、私についていえば六十六名の参加者のうち三十四名と、その後

も何らかの関わりが続いている。

三、ロジャーズの果たした歴史的役割 （科学・パラダイムの変換のいない手）

ロジャーズが活躍したのは心理学やカウンセリングの分野だが、科学に及ぼした貢献は、単に心理学やカウンセリングにとどまらない広がりをもっているように思われる。ロジャーズの晩年の著作は、その傾向が顕著にあらわれている。その遺産はあまりにも大きく、それを読み解く作業は緒についたばかりのように思われる。

ロジャーズが挑戦したことは他の科学の分野をも巻き込むような大きな科学のパラダイムの変換であったように思われてならない。新しいパラダイムは、新しい表現形式を必要とする。ところが、ロジャーズが生きた時代は、乗り越えようとする既存の科学パラダイムの最盛期にあり、新しい表現形式はいまだ生まれておらず、既存の言葉で表現せざるを得ない点に限界があったように思う。だからといって、ロジャーズが残したものを既存のパラダイムで理解しようとすることは、間違って理解することになるように思う。既存のパラダイムの言葉で表現された新しいパラダイムの萌芽を読み解くことが、課題であるように思う。

以下に不十分な形であるが、わたしが新しいパラダイムの萌芽と感じていることを述べてみたい。

表1に、わたしが合理的科学主義と呼んでいる人間観と関わり方を、カウンセリング、とりわけ来談者中心療法の間観と関わり方を対比させる形で示した。合理的科学主義は中世以後、西欧を中心に普遍的に共有された思考のパラダイムで、物ごととは合理的に科学的に探究すれば真理に到達するという考え方である。

表1.

思考のパラダイム	合理的科学主義	脱「合理的科学主義」 (新「主観主義」)
誤りの原因	無知、誤った知識	心のわだかまり
主な対象	思考（客観性の尊重）	感情（主観性の尊重）
対応	啓蒙、正しい知識の普及	わだかまりをほぐす
相談場面の対応	話す、誤りを指摘する	聴く
取り組みかた	原因探究解決提示	現状の理解
聴き方	批判的	許容的

かなり荒っぽいことを承知で言わせてもらえば、この考え方では、人間が誤った行動をするのは無知か、誤った考えを持っているからとする。とすればその対応は説明、あるいは説得ということになる。いわゆる無知を啓くという意味で啓蒙主義となる。

この立場にたつ援助者は、どこが間違っているかに敏感でなければならず、いきおいその聞き方は批判的にならざるをえない。また、無知か、誤った考えが誤った行動の原因であるとすれば、扱う対象は思考であり感情にはならない。そして、指向性として、原因を探究し解決を提示するという、いわば客観性の尊重という立場になると考えられる。

現在このモデルを見ようとすれば、医師がその典型であろう。この枠組では熱心になればなるほど、医師がより多く説明し、その内容は病気の性質や正しい養生の仕方の説明であることが多い。患者の不安や不満という感情面はたとえ表明されてもそれを受け取る枠組を持っていないのである。これは教師にも言えることかもしれない。

他方、フロイト以来百年かけて心理療法が見出してきた枠組は、これとは全く異なったものであるように思う。誤った行動や本人にとって不都合な行動の原因は誤った知識ではなく、感情のわだかまり、もつれであると考え。これは外からの操作でほぐすことはできず、本人が自発的にためらいながらも表現することではかほぐしえないことを発見したのである。

この立場にたつ援助者は自発的な表現を促すような雰囲気をつくるのが課題であり、聞き方は許容的にならざるをえない。原因が感情のわだかまりにあるとすれば、その対象とするところは当然感情が中心にならざるをえない。感情は究極的には本人にしかわからない世界であり、従って本人の表現が最も尊重されざるを得ないのである。

そして指向性として、原因を探究し解決を提示するのではなく、感情の世界をより深く探究したり、現状の理解を深めるといふ主観尊重の立場になるのではないだろうか。ロジャーズが果敢に挑戦したのは、主観や感情という形なきものを、形なきままとらえるという試みであったように思われる。

この作業を通して、客観性の過度の尊重という合理的科学主義信奉の時代から、新主観主義とも呼べるような新しいパラダイムの幕をあけようとしたのではないだろうか。この仕事を合理的科学主義こそが世界の謎をすべて解き明かしてくれるとさえ思えた一九四〇年代から六〇年代に取り組んだロジャーズの先見性には驚かざるをえない。今後はロジャーズは思想家としても偉大であったことが明らかに becoming くるように思われる。

四、エンカウンター・グループ(E・G)の根源的革新性 〜治療から新しい時代の生き方の模索の場へ〜

最後にE・Gにも簡単に言及しておきたい。E・Gは、一般に来談者中心療法の立場にたつ個人カウンセリングを集団に適応したものと考えられている。これだけでは集団心理療法と変るところはない。しかし、わたしはE・Gは集団心理療法と際だって違うものであるとの考えを深めている。

E・Gは治療的効果はあるにせよ、その根源的な意味は、産業化社会から脱「産業化社会」に移行する時代に生まれたものであるということである。私達はこれまでかなり異なる「時間・人・自分・生き方」との付き合い方の確立をせまられている。E・Gは、さまざまな意味で脱「産業化社会」を先取りした時間・空間であったというのが私の見解である。詳細は参考文献に示した他書に譲るが、自ら選びとる人間関係の構築、時間の充実した消費、表現と反応を

もらう場、模索的生き方の体験など、これからの時代を生きる知恵を伝える工夫である。

E・Gは、偶然の産物ではなく、ロジャーズの「合理的科学主義信仰からの脱却」から必然的に生みだされたように思う。そして、新しく示そうとしたパラダイムを、現実の世界に形として残したものである。E・Gの形式や会の進め方、ファシリテーターの関わり方を解明することも、ロジャーズが伝えようとしたことを解き明かす糸口であるように思われる。

五、おわりに

ここで述べたことは、ロジャーズが残したもののごく一部を読み解こうとした試みである。まったく的はずれなものかもしれない。しかし、ロジャーズが残した脈は深く巨大である。多くの人がこの脈の発掘に挑戦し、新しいパラダイムで製錬し、ロジャーズが私達に伝えようとした意味を次々と眼前に示してくれるであろうことを願って筆をおきたい。

参考文献

島瀬 直子 他編 カール・ロジャーズとともに 創元社 一九八六
小柳 晴生 現代社会におけるエンカウンター・グループの社会的
意義ENCOUNTER 出会いの広場 No.12 24〜29、一九九一

●PCAワークショップ'83.

伊藤義美

はじめに

私が来談者中心療法とかロジャーズを知ったのは大学の学部に入ってから段階で、授業のなかで知ったことになる。熱烈な来談者中心療法派とかロジャーズ派ということではないと思うが、自分の実践や教育のなかで一番中心にすえているアプローチである。日本にロジャーズが二回目に来日された一九八三年の日本でのPCAのワークショップに参加できた経験は、今から考えたいへんに大きかったと思う。ロジャーズが亡くなったときに、日本の新聞にはロジャーズの死亡記事や関連記事は出なかった。かなりショックだった。どうしても出ないんだろう。日本ではニュースバリューがないのか。その頃でも一部の院生のなかにはロジャーズはもう古いという声が聞こえていた。畠瀬先生のように、広く浸透していったからあえて記事にしなくてもいいという見方もあるかもしれないけ

ど……。確かフロム、E・のときは死亡記事が出ていたし、関連の記事を読んだ記憶がある。

一九八七年、名古屋大学で心理臨床学会の第六回大会が開かれ、村上英治先生を企画者代表として『心理臨床の今日的課題を問う——ロジャーズが遺したもののからの出発——』ということでのロジャーズをめぐる振りかえりと出発みたいな企画があった。たまたまこの企画に関係したこともあって、また日本でのロジャーズの影響に関心が湧いてきた。ここでは八三年のワークショップのとき、その前とその後に分けて話題提供したいと思っている。

二、ワークショップ前の私にとってのロジャーズ

学部生の頃に学部の図書室に『ロージアズ全集』という立派な本が並んでいて、開いてみるとちょっと女性的な感じの、柔らかな笑顔のロジャーズの顔写真があって、なかの文章はそれほど引き込ま

れるという感じではなかったと思う。それよりも精神分析関係の本のストーリー性のあるもののほうが読みものとしてはおもしろかった。でも今からみればそういうものにもまたロジャーズの特徴があった。わりと平易に(？)、ある意味では平板といえるのかもしれないが、それほど人にアトラクティブに、おやつと思わせるような記述の仕方とか内容ではなかったと思う。それは自分の臨床の実践とか経験が基礎にあって、そしてそれを通して思索や研究のなかで出てきたものが誠実に記述されていたのであった。その頃はそういうこともよく理解していなかった。

名古屋大学の当時(一九七四年)の臨床心理相談室で、最初のカウンセリングの出版は、自閉性の障害児をもつ母親のカウンセリングで、個人カウンセリングではなかった。これが興味深く、カウンセリングの出版の経験としては良かったと思っている。それから青年期の個人カウンセリングを手がけるようになった。またエンカウンター・グループの方は大学院の後期課程に入った時点で、その夏に富士山麓の朝霧高原での増田實先生のグループに初めて参加したグループの参加の時期としては早くないかもしれない。個人のカウンセリングとは違ったグループの世界のおもしろさを感じた。短い期間で、皆が、皆の力によって皆の前でいっしょに変わっていく、そんなグループのおもしろさにひかれてグループに出るようになった。当時、ちょうど名古屋大学の学生相談室が主催して『自己(再)発見のために体験セミナー』が始められ、それにもメンバーとして出た。

このように八十三年のワークショップ以前は、自分の臨床実践を少しずつ進めながら、エンカウンター・グループに出るとか、田畑治先生のカウンセリング研究会に出たりしていた。カウンセリング研究会では自分がやったカウンセリングのテープと逐語記録で検討することが中心だった。ロジャーズがあげた治療的態度条件をどの

程度実現しているか、クライエントの気持ちをどのように理解しているか、感情の世界の中に入ってどう動けるか、ロジャーズが出してきたものをどの程度実際にできるのかどうか、ということを探っていた時期だったと思う。しかしそのうちに思春期妄想症(自己臭)の男子高校生と会うようになって、新しいチャレンジという意気込みはあったが、ロジャーズの治療条件自体の体現も十分でないのに、難しいケースに会ってかなり困ってしまった。そこでなにか補助的な手段を、具体的には卓球を補助的な媒介としてとり入れてなんとか対応しようとした。例えば、エンパシーの能力とか感じる能力にすぐ恵まれている人は、エンパシー能力や感じる能力に支えられてやれるかもしれないけど、そういう能力がかならずしも豊かでない人は自分なりになんらかのプラス・アルファをもってきてやらないといけないような感じがしつづつあった。ロジャーズの考え方とか理論というのはベースとして、自分の基礎的なものとして位置づけられ、そのうえに何が必要かなという気がしつづつあるときに、PCAのワークショップで日本に來られるというので運よく参加することができたわけである。

三、ワークショップにおける私のロジャーズ経験

PCAのワークショップでは、もっとじかにロジャーズから学びたいという気持ちがあり、期待していた。他の多くの参加者たちといっしょになってというのではなくて直接というか小人数で、ロジャーズが提供してくれるものをいろいろと吸収したいと思った。決して崇拜ということではなかったが、なかなかこちらからカリフォルニアまで出向く機会がないし、ひょっとしたらこれが最後の機会ということで、できるだけいろいろと学びたいと思っていた。そこでは一貫して主張してこられた治療観や新しい科学観を話され

たり、個人のカウンセリングのデモンストレーションがあったり、また娘さんのナタリーが表現療法をやったりした。PCAの不变なところとつねに発展し続けるところを改めて知り、パーソン・センタードの考え方や人間哲学を別の形で表すことができるんだなと思った。

これと関係すると思うが、人間関係研究会の資料のなかでH先生がラ・ホイヤへ行って「自分がカウンセリングに上達するにはどうしたらいいか」とロジャーズにたずねた。それに対してロジャーズは、「それはいろいろある」。それ以上重ねて聞いても、こたえなかった。ロジャーズ以外の人たちは、ロジャーズとは別のやり方でカウンセリングをやってその実をあげていたという。そういうようなことを読んでも、やはりロジャーズと同じようにはもちろんできないわけだから、なにか自分なりのものを見つけないといけないということ、つまり、自分を十分に生かせる何かを自分なりに見つけたり、身につけていくことが必要なのだと思った。ワークショップでは、参加者のなかでいろいろな自発的なインタレスト・グループができてきて、それもパーソン・センタードの参加の仕方だと改めて思った。同時に自分の参加の仕方が一面的なものであることに気づき、他の参加者の人たちの参加の仕方にけっこう刺激された。いろんな領域の方が、いろいろなものをもって集まってきておられ、はば広い感じと個別的な感じが、とても新鮮だった。

四、ワークショップ後の私にとってのロジャーズ

ワークショップ以後は、やはり直接接したことでロジャーズの本などの読み方もかなり違ったのではないかと思う。前よりも自分なりにその意味あいをもう少し吸収できるようになったかなと思う。身近に感じられるようになって、最初の頃はおもしろみのないよう

な文章がけっこうその奥には深い、味わい深いものがあるなど、少しずつそんなところもわかるようになった。と同時に、また初心に戻って、ロジャーズの考え方、出されてきた態度条件は基本だからそれに戻ろうということで、それを大事にするような心がける時期があった。ところがボーダーライン的な女性に続けて会っていく機会があるのとまた別のなにかが必要だなと考え出す。そこでワークショップ以後に考えたことは、ロジャーズの考え方とか理論あるいはやり方は自分の基礎として、必要と考えられるならそのうえに何か自分がよく生かせるものを探していこう、ということだった。それで、最近ではフォーカシングに関心をもって取り組んできている。

今年（一九九一年）の三月にフォーカシングのことでシカゴに行く機会があって、わずかな時間だったがシカゴ大学に寄ってきた。実は一九八六年にラ・ホイヤなどに行くツアールが計画されていて参加するつもりでいたが、ツアーそれ自体が中止になってしまい、しかも次の年にロジャーズが亡くなってしまい、残念なことをしたと思っていた。それでシカゴ大学を訪れたことで少しは慰めになったと思っている。ついでに言うと、フォーカシング研究所のスタッフが、なぜシカゴ大学へ行ったのか不思議がっていた。ジェンドリン・E.の師でもあり共同研究者であったロジャーズがかってそこにいて輝いていたことも、今ではあまり関心が払われなくなっているのかもしれない。ある面ではそれぞれがロジャーズを自分に一番活かせる形で追求していくのが一番いいのではないかと思っている。それは最初に少し言ったようにロジャーズが個人個人に吸収されていく仕方は個々にいろいろあるけれども、ある面では非常にバラエティのあるなかでより個性的なものがそれぞれ創り出せるのではないか。そのことが一番必要だし、自分が自分自身に近づいていくこと、自分なりに生き生きと活かしていくことを自分の課題としていきたいと思っている。

ようになってきている。

二番目に、今後、実際に難しい臨床ケース（境界例、精神病圏など）との対応が迫られることが多くなると予想されるので、現実レベルでの方法論ということが考えられる。つまり、現実的なレベルでの方法論を蓄積し、構築していくことが期待される。このことは、態度条件を安定的に保持することに役立つと考えられる。

三番目には、訓練・養成の問題がある。現在、逐語記録をつくっての具体的なやりとりの検討、個人やグループのスーパーヴィジョン、エンカウンター・グループへの参加などが実際面としてやられている。しかし体系的に考え、実施するとなると、その理念とともにどんな中身、内容と方法が最小限必要となるのか、有効であるのか。来年（一九九二年）は国際的なプログラムが計画されているようだが、日本なりの体系的なプログラムを創ることが必要であろう。また、四番目の応用領域、社会的な適用ということも、わが国では教育や看護などの実践や研修でおこなわれているが、まだまだ挑

● 討議部分発言要旨

増田實：それでは、ご自由にお考えなり、ご質問なり、あるいはそれに対しての討論なりを進めていただければと思います。どうぞどなたからでも結構ですから、ご発言下さい。

戦できるかもしれない。

五番目は、亡くなってからその人の存在がはっきりしてきたところがあるが、ロジャーズ研究という問題である。それと他の学派、理論との比較が考えられ、最近是自己心理学のコフト、H・の共感と比較されたりしている。またアメリカと日本、ヨーロッパ、それぞれの国でPCAは発展しているが、それぞれの文化、歴史のなかでかなり違いがあるのではないか。そういう視点もひとつの大きな研究のテーマになるのではないだろうか。

このような課題を頭に浮かべながら少しずつやっていきたいと思ってる。個人カウンセリングとエンカウンター・グループに関心をもって取り組んでいるが、その中にフォーカシングのなかかわり方を取り入れているのが現状である。その基本は、やはりロジャーズの人間観や中核条件あるいは実践、生き方を自分なりに活かしていきたいと思う。

● いとう よしみ
名古屋大学教養部

平山栄治：旧姓申の平山です。ぼくのロジャーズの最初の体験というところで言うと、十五年くらい前学生だったころに友田不二男先生の日本カウンセリング・センターのカウンセリングという言葉がと

でも新鮮に残ったが、日本でロジャリアンの人が「わたしはロジャリアンだ」と言うのが不思議に感じられた。ロジャリスにとって例えばロジャリアンにとつてのロジャリスのような人はいたのだろうか。比較的色彩々な人から影響を受けながら自分を生きた人なのだろうと思う。

島瀬稔先生が「エンカウンター・グループとその心理的成長」で書かれていたロジャリスとの対話の中で、エンカウンター・グループの出発点はどこかということ、ロジャリスがフロイトと書いてその個人療法の線上にクライエント・センタードを位置づけ、それからTグループの流れが合流していく図をかいている。ロジャリスの中でエンカウンター・グループがああいう風に位置づけられているということが面白いと思う。それとロジャリスの中のオート・ランクだとか。九大に来て精神分析の授業でフェレンツィの弛緩療法をやったりするとエンカウンターと似ているなと感じた。

小柳晴生：休憩時間に平山さんと話していてなぜ思想史が突然出てくるのかという質問を受けた。フロイトは臨床心理学の枠組ばかりでなく思想史の中でとらえられる。ロジャリスの本質も、心理療法での精神分析や行動療法との違いというレベルの中だけでとらえるには大きすぎてとらえ切れないのではないか。多分先にいって、思想史の中で他の分野で似たような変革した人たちと並べて語られるようになった時に、ロジャリスの真価は見えてくるのではと考えている。

平野信喜：心理学以外にロジャリスはどんな影響を及ぼしているのか、例えば具体的に？

小柳：例えば教育の分野など。

野島一彦：教育、特に社会教育の分野でロジャリスへの関心と影響が見られる。ぼくの隣の研究室の社会教育学の先生がロジャリスの全集が読みたいと言って来られたのでその理由を聞いたら、いま社

会教育の分野でトレンドはセルフ・ディレクテッド・ラーニングということになっていて、それを支えるベーシックな文献の一つとしてロジャリスが大切にされているらしい。研究者の範囲に留まらず、実践面でもバックボーンになっているようだ。

平野：人類学、思想史、芸術、文学などの分野での日本でのフロイトの広範な影響に較べられるような影響が見られるだろうか？ ぼくらは日本でのロジャリスの位置を確認する必要があると思う。

小柳：フロイトが亡くなったのは一九三九年で、日本でフロイトが思想史の中で捉えられるようになるのは六十年代の後半、タイム・ラグとしたら二十年位かかっている。もう少し待たないとロジャリスが他の分野に影響を及ぼすかどうか分からない。消えてゆくかも知れないし残るかも知れない。

島瀬直子：ロジャリスはあくまで人間の現実を科学者として見た。

小説の題材になるようなヒント的なフアクターは無い。フロイトのギリシャ神話から持ってくるような理論なら文化史に影響を与えるが。ロジャリスはそれをしなかった。人間の生きた現実から逸れないように逸れないように、面白くもおかしくもないような人間のありのままの現実の中に広い心理学の世界を見ようという方向をとった。そこからは恋愛小説の一つも生まれないというのがロジャリス流かも知れない。

平野：それを聞いて安心した。わたしたちは生きた人間の現実を具体的眼をもってやっていかなければならないということで少し安心した。

島瀬稔：わたしの考えを付け加えたい。そしたらあなたの言うようにフロイトは大きく影響したのか。精神分析の影響はそれなりに受け止めている人もいるけれどもマジョリティは違う。「静かな革命家カール・ロジャリス」という面白い論文を書いた人がいる。ここ数十年間に臨床心理学はテスト中心からカウンセリング、心理療法

中心へ移行した。親子関係でも、親中心からチャイルド・センタードへ。日本でも産業界では相変わらず管理的で生産能率第一主義の人もいるけれども、人間尊重でなければならぬという姿勢の浸透など、名前は出ないが背後にロジャースの影響は大きいと見ている。教育でもわれわれのやっていることはマイノリティーかも知れないけれども、ロジャースの影響を受けて人間中心の教育を追及しているグループもある。これらは彼が思いもしなかった色々な分野に影響している一例である、マジョリティにはなっていないが。

＊Farson, R. 静かな革命家、カール・ロジャース、Rogers,

C.R. 編金沢カウンセリング。グループ訳、畠瀬稔監修一九八

〇、エデュケーション、関西カウンセリングセンター第9章

増田：話題提供者で何か付け加えたい方はございませんか。

畠瀬直子：アメリカ社会ではセルフ・ヘルプ・グループという形で生まれ変わってロジェリアンの活動が社会の隅々にまで浸透している。高齢者のためのセルフ・ヘルプ・グループとか。たとえば離婚訴訟の場合ファミリー・セラピーを受けるよう命令が簡易裁判所から出る。その費用は保険から出るがその制度自体がいま破綻している。それでセルフ・ヘルプ・グループがカリフォルニアでは大きくなっている。

二十一世紀には現在の心理セラピーやカウンセリングはニーズの増大と費用の負担の面で対応できないと予測されている。その分セルフ・ヘルプが広がりがつつあって、日本にも急速に入っているのでは。CBSかABCテレビの有名なドキュメンタリー番組「20/20」でセルフ・ヘルプ・グループを見たのだが、州政府が経費を出してセルフ・ヘルプ・センターを作っていて、UCLAの研究者の協力を得てセルフ・ヘルプのガイダンスのビデオを作り公共図書館で貸し出すような制度も。市民はそれを無料で借りて勉強してセルフ・ヘルプ・グループを作るといふ形らしい。

伊藤義美：ちょっとした情報をつけ加えますと、文学への影響というところで三島由紀夫の『音楽』という小説があります。その中に来談者中心療法と精神分析、現存在分析が出てくる。精神分析医が冷感症の女性の治療をするのだが、その中で来談者中心療法におけるカウンセラの態度が取り上げられている。

光岡征夫：ぼくは敢えていやなことを言いますが、ここに出ておられる方は大体クライエント・センタードの立場というか、関心のある方で、発展を願っているわけですね。マイナスの面とかは余り考えていられないでしょうか。気になっているのは日本ではノンディレから始まり歴史的に長いにも関わらずその割には伸びていない、どこか引っ掛かっている。主流になれていないのでは。

平野：ぼくの言ったのは他の分野ではということ、カウンセリングの分野では主流になっている。

() :わたしの場合教員養成をしている。生活指導のカリキュラムの中で、ロジャースとは言わないがそういうことを大事にしている。看護教育の中でエンカウンター・グループをあちこちでやっている。教育委員会の中の現職教員の研修にエンカウンター・グループを実施。法務省が拘留所とか窓口とかに、また民間の職員の研修にカウンセリング・マインドとか、カウンセリングそのものではないが。そういう形でわたしは明るいというか素晴らしい発展をしていると思う。

畠瀬直子：日本の人間関係は親分子分的ですよね。親分の言うことは絶対服従しなければ、大学でも出世できない。独特の人間関係があると思う。ロジェリアンの人間関係とは根本的に違う。この親分子分的関係が二十一世紀になろうとする今も残っている日本の何らかのシステムがある。そこでは主流となりえないかも知れない。根本的にどこかが違う。

野島：そのような支配と服従の人間関係のあり方は、日本に限らず

響は分かっている。心理療法のレベル、技術論で言えば足りないところ、そこから発展したところ、付け加えるところはある。思想家のロジャースをとらえるのはこれからの作業だ。

野島：思想史のレベルでは小柳さんの言うように捉え切っていないという感じがする。カウンセリングやサイコセラピーの領域の中でロジャースを越えたのか越えていないのか、全然新しいものが出ていないのじゃないか、この辺についてですが……。

(一)：どう位置づけるのか。他の何百もあるセラピーの中でロジャースをどう位置づけられるのか。信奉されるのは結構なのですが、同じようにロジャース、ロジャースという中でも色々とまた発展しているのではないか。国際会議などではどうなのかとか。信奉してそれを深く研究して実践しようとする方がいるのも当然だし必要だと思うが、それをさらに発展させる立場は日本にないのか。

野島：それについてですが、ぼくはそれはあると思う。ロジャースから出発してぼくでさえ二十年たっている。そうすると色々体験してきて自分なりの工夫をしてきて何とかやってきている。ただその何とかやってきているのだけれども、元祖ロジャース理論、元祖精神分析理論というのは非常に切り口もシャープで見栄えもよくかつこいいんですが、われわれの実際にやっていることはそれほどかっこよく、これまでと違った新機軸を出したという形で言えるほどかっこよくはうまくまとめ切れないというか、概念化できないでいる。ぼくの場合は体験的にはおそらく臨床をやっている人はそれぞれ自分なりのロジャースと違った自分なりの自分流を、ロジャースをベースにしながら作ってきていると思う。しかし、それを言語化したり理論化したりするところになるとほとんどやっていない。

この辺はぼくはロジャースはスーパー・スターだと思う。と言うのは、実践もやりながら理論化もやるという形でも両方やる人だから。しかし、凡人のセラピスト、ぼくらは余りこの理論化という

形にもっていけないところがある。と言うのは、下手に言語化してしまうと格好はいいのだけれど、セラピーが駄目になる感じのところがある。だから、臨床家の人がなかなか言葉にできない、形にできないというのは、何もやっていないのではなくて、やってしまっただけか自分が保てるかどうか、その辺にリスクなり不安がある感じ。そういう意味では少なくとも体験的にはロジャースから出発してそれぞれが自分流を作っていると思う。ただ形ができていない。

平山：その自分流が、ロジャースの言っていることを超えているか超えていないかということは別にしても、その人の体質に合うような発展というものはあるのではないかとということ言うと、例えば東京フォーカシング研究会の人たちの実践は、既にジェンドリンの言っていることとかなり違った所に進んでいるのではないかと印象を私は持っている。ジェンドリンの理論で説明はできるとしても、どんなあの人たちの発展の方向に進んでいっているように見える。

平野：ぼくもロジャースが好きで、何が好きかと言えばそもそもロジャースの個人の徹底した尊重ということ、そして自分も尊重される。この態度で相手とぶつかると、ロジャースのいう人間観とブラバラン人間観、民主主義、個人が徹底して尊重される考え方をどう受け入れるか、これがぼくたちの担う課題だ。何百も流派のあるアメリカのように日本でも個人の尊重された技法が出てくると思う。鈴木正子：関連して先程から思っていることがある。わたしは看護の仕事をしています。ロジャースが好きで、ロジャースに自分の看護の基本を依拠してやってきたという感じが強い。そこで、ロジャースの理論について、ロジャースには方法論があるんだという考えもある、いや、ないという見方もある。ロジャースの書いているものは、例えば極力「自分がこうした」というのを物凄く慎重に

光岡：ロジャースはこう言ったということは言われる。しかしロジャースはこう言ったがわたしはこう考えるというのをわたしはいまここでは聞きたかった。ロジャースは全部言ってしまったと言われるとぼくらはそれ以上何も言えなくなってしまう。柘植道子：わたしは自然科学者としてロジャースをとらえてしまいたい。ロジャースは自分の立てているのは全て仮説であり、全部間違っているかも知れない。間違っていたらいつでも直してくれとそこまで言っている。理論化するけれども精神分析みたいに、精神分析の批判みたいになります。精神分析の理論はがっちとあると事例を見るときに、理論に合ったものだけをピックアップして理論に合わない部分が抜け落ちているように見えることをする。そして理論は傍証された、確かめられたと言う。ロジャースは理論はあるが現象を大切にして、そこに見えるものから理論を作っていた。そうするとそれ以上の科学者はあるだろうかと考える。それを大前提

に自然の法則を大切に与えられる。その大前提には自然科学者として反論の余地はないようにわたしは感じる。現象と違うところは批判できるが。

光岡：大原則は大原則として、その現象を大切にするという態度はロジャースに限らないのでは。現象を大切にするという大原則は大原則として大切に、だからといって別にロジャースを崇拜することにはならない。野島さんにお聞きしたいことがある。精神分析の訓練を受けてそれがご自分のベースになっていると言いがら、まだそれを言わないほうがいいと言われたがなぜそうなのだろう。ぼくは精神分析は役に立つし大事なことを一杯含んでいると思う。それを生かしてもっと言ってもいいのでは。ロジャースのことをもっともっと言ってほしい。そうでないと新しいものが出てこないのでは。

野島：ぼくもこの頃そう感じていました。ただこれまでのぼくの意識の中には次のようなことがあった。日本ではグループ研究が遅れていたで、ぼくはできるだけ日本のグループ研究を進展させたいという気持ちがあり、それで自分の殆どの研究は、少なくとも論文にするときにはグループでやってきた。しかし実践そのものは個人もずっとやってきていた。一人の限られたエネルギーだから、グループ研究に力を入れたことは、それはそれでよかったのだが、やはりそろそろ個人についても語ることをやらないといけないという気持ちが最近起きてきている。

(-)：わたしはロジャースを否定しているわけではなくてその考えを全面的に支持するとして、方法論をもっとよりよく実現するためにはどうしたらよいかということで色々な新しい方法がありうると思う。ロジャースのやってきたものを色々書いたものを読んでそのまま同じようにやるのではなく、野島さんの言うように精神分析的な解釈であるとか色々な試みがあったいいのでは。そういうも

のがあるのか、あれば教えていただきたいそういう気持ちでおたずねした。もうなさっているということですので、そういう試みは色々あっていいのではないか。

古賀：さっきのわたしの話を聞いてわたしを見られると、つまり、ロジャースが偉大だから、その中から抜けれないと私が言ったので、ひよっとすると、わたしはロジャースの信奉者のように見えるかもしれない。しかし、わたし自身は決してそうは思っていない。ロジャースを信奉するとかしないとか言われる人がいますが、そのことについて、ロジャース自身が言っていることがありますね。それが余り語られないことは不思議だなと日頃思っているのですが。わたしはロジャースに直接会ったこともなく、本を通じて接しているのですが、わたしがロジャースを素晴らしいなと思った大きな一つは、ロジャースが邦訳全集の序に書いていることです。だいたいは次のようなことです。この論文集にはずっと以前に書いたものでも今はおかしいと思うものもはいっている。そういうものは省くとも考えたが、それらも含めて過去のすべての論文を公刊することにしました。それは、いいものばかり出していたのでは聖書のように信奉されるかも知れないからだ。この中には誤りも沢山含まれているというところの方が、読む人が信奉者になるのではなく、一人一人が自分で考えるのにとっても役立つから。

わたしはこれを前提にして話しています。わたしが今やっている実際の具体的姿は、ロジャースとはとても違っています。ニコニコばかりではありませんし、課題もどんどん出しますし、自由教育ではなくて公立学校ですし、していることはとても違います。何もかもロジャースの言うようにしようとする信者ではないのです。しかし、それも基本的なところまでかえるとロジャースの枠の中にいるという事です。細かなところでは、ロジャースが言っていることで、これはおかしいと思うところもあるのです。だからロジャースはす

ばらしいと言った人はみなロジャースの信奉者だとする理解の仕方
は狭いのではないかと私は思います。

光岡：そう言っていただとよく分かる。だからもうちょっとこの
場でもそういう違いをもっともつと出して、ロジャースにいまの自
分はなにを感じているか、どこが違ってきたかをもつと言ってほし
かった。その方がぼくはここに来た甲斐があった。今日はわたしは
不勉強なのでここに勉強をしに来た。その割りにできない感じが
あって、日本のロジャース研究はこの程度かと、口幅ったい感じで
すがそんな感じを持った。皆さんがやっておられるのなら、聞かせ
ていただきたい。これは自分が出さなければいけないことでもある
が難しくて。

木村易：野島さんに質問したい。ロジャースが個人セラピーをずつ
とやってきてその最終的到達段階として精神分裂病の治療の集団的
な取り組み（一九六七年の「治療的関係とそのインパクト…分裂病
者との心理療法の研究」）がある。そこからどう乗り越えるかとい
うことが問題だったと思うのだが、ロジャースはそのあとグループ
に転じる。この転換はなんだったのだろう。自分の年齢もあってか
れはどこかで書いているが、関心を自分の理論や方法の社会的適応
の方向に移した。あの研究はロジャースの個人セラピーの仕事の究
極的到達点であり、分裂病の治療は現在でも大きな問題としてある
と思うんだけど、それが野島さんが興味を持てない、支える理
論として精神分析の方に惹かれるというのはなぜなのか。

野島：その本をぼくはよく読んでいない。どうも読む意欲が起こら
ない。不勉強なんです。前後の学んだ感じから言うと、ロジャ
ースは分裂病の患者さんの治療に失敗したとぼくは思うんですね。失
敗したというのはいまよくわからなかった。ロジャースはジェヌインネ
スを大切にしている。患者さんはある意味でウルトラ・ジェヌインネ
スなんです。ウルトラ・ジェヌインネスにジェヌインネスで付き

合っちゃうと、こっちの方がやっぱりあっちの世界に行く可能性が
あるわけね。そういう意味でロジャースは一時おかしくなりました
よね。ロジャースのそれまでのあのやり方では失敗したと思う。そ
の辺を失敗せずに患者さんの奇妙な世界に付き合うために彼が必要
だと思っている。何もなしに素手で川を泳ぐのはちょっとやばい感
じ。その意味で筏として救命具として精神分析の理論が貢献できる
感じ。でもこれは両刃の剣で、何もなくて泳ぐとフリーに泳げて、
筏がついたり救命具がつくと溺れはしないんだけど、ちょっと動き
が鈍くなるという二面性がある。

皇瀬直子：わたしはあのシゾフレニーの論文はオリジナルを丁寧
に読んだ。当時アメリカでは五十万人の院内患者がいてそれを減らす
のが国家的事業だった。それで莫大な研究費がロジャースに下りた。
丁寧な対照群をつくり本当に長期の患者さんから急性の患者さんそ
の他の人たちの多くのグループに膨大なテスト・バッテリーを組ん
で治療効果を捉えようとした。結果としてサイコセラピーは役立つ
例えば看護スタッフによる患者さんの行動記述では院内適用がよく
なり、また退院後病院に戻る率が低いなどの結果が得られている。
ただテストでは効果が見られなかった。これは用いたパーソナリ
ティー・テスト自体がパーソナリティーの比較的不变的な部分とは
らえるがこまやかなパーソナリティ変化を捉えるものでなかったた
めと解釈された。またこのプロジェクトでは初めて心理学者がヘッ
ドになってドクターがその下に使われるというアメリカで初めての
研究であったことからくる難しさもあり、ロジャースは大変苦勞し
たが、最後には医師たちとの間に友情が生じたとロジャースは書い
ている。

入院患者のアウト・ペイシェント化がこの研究の目的でその目的
は果たしたと評価できる。アメリカでは明確にその方向にある。論
文は日本語訳があるがちょっと分かりにくい。オリジナルの方を読

むと分かる。応答のない慢性の分裂病の患者さんたちに廊下に立って、「自分はここにいますよ、あなたの存在を感じていますよ」といった、いわゆるロジェリアンのカウンセリングを懸命にやった。これは研究でなければ到底できなかったらというのがスタッフの感想だった。その困難な作業に耐えてやったらそれなりに少し変化があるというのが結果だと思う。

野島：それを聞いてこんな観点から見ることができのではと思う。プロジェクトとしてやるということはセラピストも頑張っているわけ。ある意味でセラピーは一回目はうまくゆく可能性が高い感じがある。こんな研究がありますね、経験のあるカウンセラーとド素人のカウンセラーを比較するとド素人の方が効果があったという。一回目効果という感じがある。ロジャースたちが研究としてやったことを多くの患者さんに対して長期にわたってヘルプするということを考えると、従来のクライエント・センタードのあれだけでは心もたない。

畠瀬直子：あの研究はあくまで精神科治療をアウトペイシェント化していくための研究ですから。

畠瀬稔：色々な感想や意見を持っているが、日頃非常に感じていることだが、学会で、特に心理臨床学会でもケース・レポートは殆ど精神分析的な解釈で、ぼくらには違和感があつてついでいけない。クライエント・センタード的あるいはそういう枠組みでなくても、ロジャース理論のいいところは、本当に納得できるというか実感として余り抽象的に観念的に飛躍しないところなので。もっと地道なケース・レポートとか、個人セラピーのトレーニング・ワークショップがもっと必要なのは。そういうのが殆どない。そしてフォーカシングとかエンカウンター・グループとか学会のテーマとというのは流行があつてそちらにいくわけだが。何か地道の、本道とどうか。ある意味でロジャースの理論はわたしは非常に先進的なもの

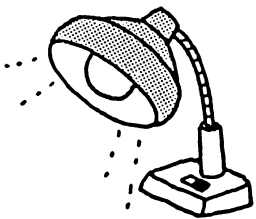
のを持っていると思つてゐる。時代を先取りしているものがあるので、その方向で地道にやつていつて欲しい。そんな考えを持っている。

増田：それでは時間になりましたので、「わが国における来談者中心療法とパースン・センタード・アプローチの発展と評価」という今日のシンポジウムを終わりにいたします。その評価は、それぞれにお任せすることにしたと思います。五年に一回でも同じテーマでやってみたらというお話もありましたし、一回だけでの評価にとどめずに、継続的にすすめて、またその評価も続けてなされればと思います。どうも有難うございました。

（本稿は討論部分の発言をまとめたものである。発言者を特定出来なかったものは、発言者欄を空白にしている。また文中で敬称を省略した非礼もお許し頂きたい。なお、前掲の四編の論文は学会発表を、各自が後日加筆呈正したものである。）

文責、木村易)

きむらやすし
・愛知大学



ボディ・ワークが自己身体イメージに及ぼす影響

——ある風姿花伝——

矢 幡 洋

一、身体の虚構

そこは、古いアパートの廊下の片隅である。壁の上にすすけた小窓があつて、そこからうす曇りの光がぼんやり差込んでいる。床の方はもっと暗い。そこに、玩具の手押し車を押している幼児の姿がある。他に誰もいない。

幼児が一步進むと、木製の玩具のきしむ静かな音がする。幼児の小さな肩がみえる。色白なうなじがみえる。だが、幼児は決して振り向かず、その顔はみえない。

これは、私が自分の最初の記憶だと信じている情景である。怪しいものだ。だいいち、見えるはずのない自分の後ろ姿が場面にあるというだけで、不条理ではないか。だが、いつの間にかそう思い始めたのか分らないが、この情景がたどり得る最も古い記憶なのだと信じていた。多分それは、他のものでもよかったいくつもの可能性の中から選びとられ、生の初めにすえ置かれたひとつの神話に過ぎない。

だが、それが虚構であろうと、その上に私たちは自分の人生物語を創作してゆくのである。編年体の一人称の小説を限り無く書き続けるように。虚構の上に積み重ねられた虚構が、

やがてリアリティーを帯びるに至る。私達はそれを史実と思い込む。多分、生きてゆくのにそれらの物語は必要なのであろう。そして、物語の一つに私達の身体に関するものがある。私の身体は醜い。あるいは、私の身体は美しい。私の風貌は教師のように見える。あるいは娼婦のように見える。私の表情はかたい。うつむいてみると、私は人に暗いイメージを与える。私の身体は疲れてもすぐに力を回復する。コートを着ると、私は男らしく（あるいは女らしく）見える。私が小首をかしげるとき、そのポーズは俳優の誰それに似ている——。

私達は、自分の身体に対して、ある程度一

定したイメージを抱いている。そのうちの幾つかは想像であり、幾つかは他人の観察と一致する。それは、生の歴史の中で、修正を加えられながら生成してゆく。私は、自らの身体イメージの形成過程を追跡してみようと思う。それは同時に、「からだの自分史」であるだろう。

二、身体の来歴

「最初の光景」の中に既に、最初私が自分の身体をどのように感じていたかが暗示されている。うつむいた幼児の後ろ姿のかぼそさと頼り無さ。私が身体を牢固で強力なものと感じていたという証拠はどこにもない。母親の証言によれば、私は、幼稚園で毎日泣かされて帰ったという。自分というものの存在を他人から区別するようになった少年達がまず夢中になることは、身体の機能を競うことによって自らの優位性を証明しようとするものである。腕相撲・幅跳び・喧嘩……このパトリックな世界の中で私が自らの優越を確信する機会がなかったことは想像に難くない。私の基底をなす感覚は「できない者」の怨嗟と屈辱である。

小学校に入って最初の視力検査で両眼とも

○・三しかないことがわかった。クラスで自分ただ一人が、視力表が見えなかった場面を今でも鮮明に覚えている。そして、その後級友達にそれをふれまわって歩いた事も。めくるめく幸福が訪れた特別な瞬間であった。他の誰にもないにかを自分が持っているという事実が初めて証明されたのである。そして、自分一人だけが皆とは違う負性を抱え込んでいるという不幸をも。「こんなのは自分一人だ」という誇りと苦悩が生の基本的感覚となり、不幸を後生大事に抱え込み密かに満足げな笑みを浮かべることを私はその後、繰り返しする。

小学校低学年の時は、少しは喧嘩もやり、「誰それよりかは強い」というようなことで内心がいっぱいだったところを見ると、私も少年達の力による序列にまんざら無関心ではなかったのだろうが、体育などはまるで苦手で高学年の時は、「サル」というあだ名をつけられて、それにあまんじておどけていたところを見ると、私は自分の身体の機能も外見も低くみていたことは間違いない。その底に、自分は他人とは違うはずだ、というくると、自分には他人とは違っていたにせよ。しかし、ある時点で私の身体へのかかわりは一変する。

中学校に入り、数学のテストで、それまでは並以上の成績をとったことのなかった私は

クラスの上位の点数をとる。それと同時に、短距離走でいいタイムがでる。「自分には何かがある」という幻想が、具体的な数字で実証されたはじめての出来事であった。私は、殺人的な受験戦争と陸上部にのめりこんでいった。成績が上がる度に興奮がわきたった。それは、生の一つのスタイルとなった。スタート練習であれ、因子分解であれ、単調な努力を積み上げる。その強度を極限にまで高める。すると、それにみあって結果がより上がって返ってくる。

私の身体は目的を達成するための手段に過ぎない。それも、もっぱら「どこまで耐えられるか」という耐久性だけが要求される道具に過ぎない。身体それ自体が目的とされることは決してなかった。快であれ暖であれ、身体を満足させる機会が求められることはなかった。

時おり、美しい夕暮れが訪れると、忘我の瞬間がやってきた。それは、いかなる目的遂行性からも解放されていた。また、自然観照と並んで私が自らに許した快楽は音楽であった。私は目をつぶる。するとそこに情感だけが流れる暗い空間がひろがる、ラフマニノフの暗陰に満ちたフレーズにつれて心の中に生起する悲哀や抒情を味わうことが自分が自分のもとにあると実感できる時間であった。自然観照も音楽も極めて知覚的体験である。身

体はどこにいったのか。かすかな身体の変調が現れる度に、それが宿痼のはじめての顕現であるかもしれないと私は激しく動揺した。人体解剖図をみると、赤や黄色いはらわたのヴィジョンが幾日も私を苦しめた。身体はもしかしたらそこから私に破壊が訪れるかもしれない恐怖の座であった。

高校は私立の進学校に下宿して通った。ここでは、勉強も運動もいい成績を取ることができなかった。破局は高校二年生の時に訪れた。奇妙な恐怖が次から次へと湧いてきて、私は殆ど食事のとれぬまま冬の夜の街を何時間もうろつき回った。焦燥感が時を押し寄せて私はどんな活字を追うこともできずに外に飛び出すのだった。しびれたような感覚のうちに、私は物の腐ったような匂いのする散乱しはてた部屋の底に横たわっていた。それは氷の世界であった。あらゆる感情が凍り付き、



二度と動きだすことのない冬の氷却が続くと思われた。

私は、自分はあるとき一度破壊された人間なのだと信じている。私は破壊された光景の中を今も歩いているのかもしれない。しかし、そのことを、活字になることを予想した文章に平静な気持ちでかいている自分がいるということもまたその時の私には想像できなかった事であった。

回復の歩みは遅く苦しく、行きつ戻りつしながら二年を要した。これまでの生涯がいかに偏破で自己破壊的なものであったか。痛恨の思いが私を圧倒した。

私の生は治癒を求めて動きはじめた。私は京都大学を選んだ。その地には私が飢えていた美しい風景が待っているはずであった。私は、生涯に捨て身の跳躍を三度試みている。回復途上の精神には独りぼっちの転地は危険な賭であるに違いなかった。弱り果てた精神が、どうして周囲の反対を押し切るほどの力を出せたのだろうか。——自らを癒さねばならないという執念めいた決意に私はつき動かされていた。

三、竹内演劇レッスン

京都に下宿を始めた私は、風景に心が以前のようにふるえないことに気付いて狼狽した。心は死んだのであろうか。憧れつづけていた奥琵琶湖の森の静けさも、美浜の海のうすみどりの波に波がやわらかく重なる光景も私を慰めなかった。とりかえすべくもない膨大な時間を失ってきた、という思いが私を圧倒していた。挽回の唯一の方途は、今までお留守にしていた多くのものを摂取する努力しかない筈であった。私は生を農耕のイメージで捉らえていた。今、種を蒔いておかなければ後の実りはないであろう。そして、耕地を広げる努力は青年時代にしかできないと頑なに信じていた。

私は受験勉強以上の猛烈さで読書と音楽と絵画に没頭した。他人が怖ろしくてたまらなかったにもかかわらず、やたらに人を訪ね、劇場に足を運んだ。自らを駆り立てるというそれまでの自己破壊的なパターンを繰り返すことによって、損失を埋め合わせようとしたのはどこか皮肉な青春だが。

そうしたなかで、私は竹内敏晴のメソッドに出会った。その頃、「からだはぐしの会」、「からだところろのであいの会」などの名称で、竹内の流れを汲むワークを実践している小グループが関西に幾つかあったのである。その時の、ワークの内容は殆ど覚えていない。ただ、終わった後で、何か質問して食い下

がった私に、リーダーの一人が「ちょっと手を貸してみて」と言って、後ろから私の腕をとってゆっくり上げ始めた。私は緊張した。

リーダーが手を放したが、私の腕は拳手をしたまま、硬直していた。二人の男がそれを見て大声で笑った。その時には私は脱力できないことのどこがおかしいのかもわからないまま愛想笑いをしようとした。

竹内式表現を用いれば、その時「私は自分の身体がいかに歪んでいるかに気がついた」ということになるのであろう。私は、身体にこそ私の問題は集約されており、それが最大の焦点であり、それに取り組まなければ自分の問題は解決しないと固く信じこんだ。以後、竹内敏晴の方法は永く私を支配し続けた。私は可能な限りボディ・ワークに参加するようになった。

その時の思いが真実だったのだらうかという疑義が今の私を揺さぶる。私は竹内メソッドの体験で、新種の劣等感を植え付けられたような気がしてならないのだ。私の身体はひよろひよろしているとか体力がないとかいうばかりでなく、歪んでいるというわけなのだ。しかも、その指摘は倫理的断罪を含んでいた。身体の変みは、心の歪みなのだから。

私の身体が、対人関係の歪んだパターンを集積していたのは事実であった。しかし、竹内メソッドによるそれらのグループは、あま

りにも否定的言辞にみちみちていた。曰く、「言葉がイメージを伴っていない」「相手に言葉が届いていない」「生き生きしていない」等々に。それらは、私に実によくのことを学ばせてくれたが、同時に飽くことのない自己凝視という病へと私をおとし入れたのではないか。(私は、竹内敏晴自身のワークシヨップを受けた経験がない。彼のワークシヨップのビデオと、彼の直弟子にあたる人達から受けた多くのセッションからの限定された判断であることは付言しておきたい。)

四、箱庭療法

尿と体臭がいりまじって鼻をつくするどい臭気がその指標であった。曇天のもとにびっしりと続く木賃宿・モツ屋・娼館……それらはなんと陰鬱に見えたことだろう。塀に体を支えながら疲弊した暗い人影がごぼごぼと咳をする。あるいはアルコール臭の中に大の字になる。どんな裏路地にもしみついた貧困が風景を重圧していた。

その街は釜ヶ崎といった。関西で最大のスラムと呼ばれていた。私はその地域奉仕活動に泊まりがけで参加していた。リアカーに毛布を詰め込んで行き倒れの姿を懐中電灯で

探しながら夜を歩き回った。冬の冷氣はガラス戸をがたがたいわせ、衣類の隙間からぞっとするような冷たさで肌に触れたが私は震えながら立っていた。何故なら、自分を憎んでいたから。自分が全く経験したことのない世界が、自分を衝撃と共に変えてくれると信じていた。

その教会の倉庫に、無数のミニチュアやうち捨てられた玩具が積み重ねられてあった。砂の入った木箱があった。それが箱庭療法との最初の出会いであった。

カウンセラーと自称する人から、断続を含みながら三年ちかく箱庭療法を受けた。だが木箱の中に展開したのは統合への予定調和などではなく、夜の悪夢がそのまま昼の世界に侵入してきたような情景であった。ある時、ボクサーを模したコミカルなゴム人形が奇妙に目を引いた。それは何週間も私の脳裏を去らなかつた。その人形を最も惨たらしい方法で加虐したいという高揚を消すことは出来なかつた。まるで、ハンス・メルベールみたいに。私は、その人形の手足を可能ながざりねじまげ、全身に針を突き刺し、首に糸をかけて絞首刑にした。身体イメージを攻撃し破壊したいという凶暴な願望を押さえることは出来なかつた。屍体。生成に失敗したぐにやぐにやの生命体。ロボット化した身体。二重身。首だけの幽霊。散乱した足。毀損した体、失

敗した身体のイメージが姿・かたちをかえては箱庭世界に繰り返して現れた。終わることのない悪夢であった。

病の影は色濃く私に揺曳していた。今も私は当時の箱庭の記録写真のアルバムをめくる勇気がない。あんな先鋭な表現行為をするとは二度とないだろう。

幼少から私には、自分の内部に自身にとって危険なイメージ群があり、それには蓋をして決して出てくることのないように押さえておかねばならないと感じていた。ところが箱庭は、それ等に通じる光景を眺めうる形にしてしまった。ヴィジュアルイゼーションというのは喜ばしいばかりではない。形象は人を喜ばせるが、破壊する力も持っている。形象への怖れ。私は絵画療法をよくつかうくせに、自分自身が視覚的アプローチによって癒されたという実感を持てたことが殆どない。

五、演劇

やれることにはなんでもチャレンジしなければならぬという熱病にかかっていた私は、学園祭で演劇を企画した。現代戯曲を渉猟した挙げ句、オールビーの「ヴァージニア・ウ

ルフなんか怖くない」を選んだ。登場人物が四人で済んだからである。上演を通じて、私には自分が演技者としていくつかの有利な点を持っていることに気がついた。自分の声をかなりコントロールできること、舞台の上ではのたうちまわろうが泣き叫ぼうが「表現する」ということに対してためらいがないこと、怒りなどの攻撃的感情の表出においてはある種の迫力をもっているらしいこと、などである。上演の結果は、自分は演技者として結構いい線なんかじゃないか、と私に思わせるものであった。

この発見は私を夢中にさせた。戯曲を読む度に、「この場面を自分だったらどう演出し、どう演じるか」というイメージが白昼夢へと誘った。それは私の目指すべき道のように思われた。私は俳優養成所の夏季講座へかよった。別役実の劇作品をみる度にしばしば東京に赴いた。赤テント、黒テントのアングラ演劇にも足を運ぶようになった。演劇青年達と劇団旗あげを夢見て離散集合を繰り返した挙げ句、学内の劇団に入ったが、私が書いた戯曲は作者本人も感心しかねる代物で陽の目を見ることもなく、舞台との関わりも稀薄になっていった。しかし、確かに私は身体によって表現行為を行うという可能性へ開かれたのである。

*

六、経絡指圧・舞踏・演奏

「自分は言語を操るのには長けた人間だが身体性においては劣っている」というのがその頃の私の自己評価であった。言語を媒介とせず、身体のみで表現行為を行う舞踏家という存在に私は激しく憧れていた。

前衛舞踏をみて回ったのだが、ある時、東京で、舞台でも何でもない野外で即興で踊る女性舞踏家の公演を見た。彼女は京都でも同様の公演をやってみたいと語った。それが私のはじめてのプロデュースということになるのであろうか。宿の手配。イベントガイドへの掲載依頼。公演場所探し。

公演当日になって、私より一つ年上の青年がやってきて（彼も彼女の舞踏をみて応援に駆けつけたのである）即興の笛を吹いた。彼は、即興演奏に天才的なセンスを持っており、指圧の技を生活の資にして殆ど放浪に近い生活をしていた。魅惑的な人物であった。私は彼から指圧をまなんだ。その奥義である経絡指圧は私に近づけるようなものではなかったが、てのひらと肘を使う「家庭指圧」はかなり習得できた。

言葉ではなく、私の身体が他者にいいものを提供しうるということは初めての体験で

あった。

彼と私は即興演奏のコンビを組んだ。私達が知り合った二人の女性舞踏家のバックで彼は笛を吹き、私はガラクタを集めて音を出すか声を出した。

何度かの小さな公演のち、私は、自分が歌による表現が出来ないことに気がついて、大きなダメージを受けた。以後私は「演奏」によって他人の前にたつことを固く禁じて今日に至っているが、なおもその事実が汚辱の歴史のように私の心を塞いでいる。

声量がいかに、音色がいかにという問題以前に、私には「歌」が成立するために必要とされる対人関係の微妙な釣り合いを取ることができなかったのである。演劇ならば、絶叫によって観客に強い印象を与えることも可能であろう。しかし、歌は歌でなければならぬのだ。それは、観客の視線に相対して、情念を、美の枠を超えない範囲内で豊かに表出するという微妙なコントロールによって初めて成立する。

演劇において私は、台詞がなく舞台に立っていないけれどもならない時間、自分をひどく無力に感じていた。言葉が「他者を圧倒する」という形で私を伝えうる頼みの綱であった。歌もまた言葉であった。だが、言葉が歌であるということ、私は自分が他者を圧倒する表現の手掛かりが、掴めなかった。「歌って

いる自分の姿」をどうさらしてよいのか分からなかった。私は殆どパニックであった。そうになると、私は心密かに信頼を寄せる自分の「他者を圧倒するパワー」にすがりつく。

しかし、それでは「歌」を成立させる対人関係が成り立たない。演奏行為は端的にコミュニケーションである。とりわけ歌においては、表現者は音という媒介物のみならず、生身を聴衆に提示しなければならない。竹内レッスンで、皆の前で歌を歌ったとき、聴衆との間に調整するべき微妙な距離空間が実在するのを確かに感じた。調整しようとすればするほどうまくゆかず動揺した体験は、私の中に鮮明に残っている。うまいアイドル歌手は、聴衆との間に、自分も楽しみ人も楽しませるといふ対人関係を作ることができる。その背後には、「他人は私を喜んでくれる」という幸福な感覚がある。それが私には欠落しているのである。

七、心理劇

沖繩の精神病院に臨床心理士として就職した。沖縄県内で研修が受けられるところは限られていた。沖縄心理劇研究会の講習に参加した。

目をつぶって「石になる」というワークをやった。後で、ディレクターが、私の「石」だけは皆と違ってユニークだったと言った。

私は、外見的に、石の形をとるのではなくて、「自分は石だ」というイメージに相当する身体感覚が生じるようなポーズをとった。それは、身体を硬直させて腕を交差させた姿勢だったように思う。

本当のことを言うと私は、他人とは違った表現をする自分、それに身を投じるときには大胆になれる自分が好きであった。

八、自律訓練法

近くの精神病院に自律訓練法の指導のできる心理士をみつけた私は、半年間通って指導を受けた。

自律訓練法は、私にとって最も効果のあった治療法の一つである。あれほど私を苦しめた神経症の胃痛が嘘のように消えてしまった。半年後、「腹がすわった」という言いまわしがびったりくるような精神的变化を私は感じていた。自分が地べたの上にとっしりと立っている感覚である。ふとした時に私は自分が以前よりも静かな呼吸をしている、と実感した。

物事に対する動揺の度あいも、以前より振

幅が小さくなったような気がする。ささいなことで波立ちがちだった内界が静まったという実感であった。対人関係では、相手に受けようとして無理な笑顔をしたり——というように緊張をあまりしなくなった。減入っているときには減入った顔をする。以前よりもぶっきらぼうになったかもしれない。

自律訓練法の最中に、それまで味わったことのない身体感覚を体験した。まず、ああ、自分のからだがあるんだなあ——と、身体がぐっと近しいものに感じられるのである。手足という四肢構造に分枝した身体というよりも、それはひとつの空間であり、外界の空間とは別なぬくもりのこもった内密性がある。そして、深い自律性に入ったとき、もう動きそうにないほど全身が床と一体化した感覚があった。その感覚は、私がセラピーの効果を

測るときのメルクマールとなった。

九、鳥山敏子のワークショップ

竹内敏晴の流れを汲む鳥山敏子氏が沖縄本島の更に南、石垣島でワークショップを開催するときいて参加した。そこに、仮面を用いたワークがあった。

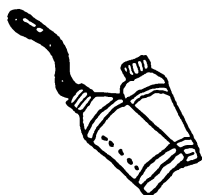
まず、ダンボール紙を土台に石膏をつけた仮面に絵の具で彩色する。

血の滴る顔面を作ったかった。くらみがかった紫を土台とした。いくつかの絵の具を混ぜると灰色に濁ったどろどろができた。それをいくすじかたらずと、血か涙のようにも見えた。とにかく、これ以上ないというぐらいいめちゃめちな仮面を作ったかった。

二人一組を作ってそれぞれA、B二つのグループに分かれ、いっぽうのグループがまず仮面をかぶってステージに立つ。後は、音楽にまかせて動く。もう一方のグループは二人一組のパートナーの動きを観察しておいて、後で感想を伝える。ファシリテーターに「声を出してもいいんですか？」ときいた私は、やはり身体運動のみの表現では（敢えていえば「自慢の」）パワーを表現することができないと思っていたのであろう。

音楽が始まったが、自分のパワーを渾身に外界に叩き付ける瞬間をうずうずしながら待っていた私は、音の流れとは無関係に全身に力を込め、宙に拳を降り下ろすとともに、絶叫した。自分の全エネルギーを放射する快感。その後に、一瞬自分が解体するような感覚が訪れる。自分の内部にこれだけのマグマがあるという満足感。しかし、喉はすぐに枯れてしまった。情感をとがらせて爆発させると、次の態勢に移るにはひどく身を処しにくい経過があるはずだがそこをどうやりすごしたのかよく分からない。いつのまにか音楽は土族の群舞のリズムとなり、グループは中心に向かって進んだり退いたり祭りの動きをなしていた。疲労のあまり私は倒れてしまうのではないかと思ったが、たしかにそこには祝祭の陶酔が混じりあっていた。音楽はいつまでも終わらず、私は集中力を失いかけて、なんとか場に自分をいあわせようとする意識的努力と、そこから朦朧と去ろうとする疲労感の中でセッションは終わった。

観察者の役であった女性が「なんだか、人間のいろんな感情を見せてもらったような気がする」と言った。夕食のときに、鳥山氏らスタッフから、「あなたのは独特で印象が強かった」「お面が生きていた」などといわれた。私の服はひどく破れていて、それから一週間、私の声は元には戻らなかった。



十、ニュー・カウンセリング

30代最初の年、私はニュー・カウンセリングと称するワークショップに参加した。

「ムーヴメント」として、ロック音楽を流して身体を動かすセッションがあった。それが舞踏というものが荒々しく身体に入り込んだ最初の瞬間だったかも知れない。私は、めちゃくちゃに手足を振り回しながら、自分が、全力をもって身体を硬直させ次の瞬間にそれを打破する狂気じみた動きをし、再び硬直するというパターンを繰り返しており、自ら呪縛し自ら打ち破るその激しさに浸っているのを感じた。自分がそういうエネルギーのコントロールをしているということは、身体運動の中で得られた洞察であった。

けれども、私にとっては、セッション外の最後の晩の体験の意義が大きかったかもしれない。次の日に別れをひかえたグループは、ホールで名残り惜しく談話を交わっていたのだが、その群の中で、私は機を窺っていた。「皆の目前で踊る」というどこからきたのかもわからない生まれてはじめての願望がもはや抑えきれぬものとなっていたのである。

酒が入りはじめた一座の中から、ファシリ

テーターの一人がゆっくりとしたムーヴメントを始めた。さあ、今が機だ、と思うとくるしいほどむねが高鳴った。一人、また一人と踊っては動きが途絶える。何度かのチャンスをつらえ損ねた後、私はとうとう踊り始めた。私は、自分のからだが動く度に、座がどうめくのをはっきり感じた。「彼の動きは芸術的なセンスがあるね」という言葉がはっきりと聞こえた。私は、休んでは踊り、夜が明けらるまで陶酔に身をさらした。そして、とうとうもう一つの密かな願望を実現した。私は着ているシャツをぬぎ、上半身を座にさらしたのである。もう一度座がどうめいた。私は一方で見詰められている自分に対し意識が過敏になるのを感じながら、すでに疲労の極にある身体をいっそう高揚させた。

翌日の私は幸福に包まれていた。殆ど想像を絶する事態が私に起こったのである。言葉がなくても私の身体が他者に歓迎をもって迎えられるということ。それは、どんなことよりも私の生に起こるはずがないと固く信じ込んでいたことではないか。

私は飛行機の都合で、日程終了前に早くかえらなければならなかった。準備を整えてエレベーターを待っていた時、年下の青年が私を追ってきて「昨晩は、とてもきれいでした」と言った。彼からきた年賀状には、「気持ち良きそうに踊っていた矢幡さんの姿が印象

に残っています。」と書いてあった。

十一、エンカウンターグループ

私が永年住んだのは、沖縄本島の中でも過疎地帯とされる北部の人口3万の市であった。そこで、「人間中心の教育を実現する会」の糸満盛理氏が長年グループを継続しておられた。日本南端の最僻地におけるエンカウンターの試みとして記憶されるべきものである。月一回、数名の密なグループを継続する中で、私の対人関係のもちかたが変化していったのを実感できた。

時期はずっと後になるが、とくに感銘深かったのは駒込勝利先生のエンカウンターである。最終日の最終セッション、私はメンバーの前に自分を投げ出す決意を固めていた。自分のことを語ろうとしたが、声がうわずってとはぎれた。

はっと気がついたように駒込先生が、「あなたの姿は祈っているように見える。」と言った。私は両腕をしっかりと組んでいた。「そうです。僕は祈っているのです。こういう自分でも許されたいと。」不意に涙がこぼれた。人前で涙を流すことは物心ついて久しくないことであった。

十二、ゲシュタルト療法

他人から、「あなたにとって最も治療的だったアプローチは？」と問われたら、私は迷うことなくゲシュタルト療法と、エンカウンター・グループを挙げる。とにかく私に「効いた」という実感があるのである。

初めてのゲシュタルト療法は30の時、篠崎忠男先生より三日間のコースを受けた。私は横臥閉眼してイメージの流れを自由連想的にしゃべりまくるやり方が好きなのだが、ワークの終わりとともに自律訓練法の最も深い自律性状態よりも更に深い、全身が床と一緒になったかのようなこの上ない平安が訪れたのは驚いた。以来、私はゲシュタルトと名のつくところには手当たり次第に出るようになる。私のワークはしばしば激烈な展開になった。ワークの最中に示した私の所作に対して、しばしば参加者が感想を述べてくれた。ポラ・ボトムワークショップで「火の塊が宙空をいくつも飛んできて、世界破滅の危機の前に電車で逃げて行く」夢を題材にワークをやったが、胸のうちに暑苦しくふきあがるものに身をまかせると、訳の分からぬ叫びをあげながら両のこぶしを畳に降り下ろした。後

で参加者が、あの瞬間は迫力があつた。下にコンクリートがあつても叩き壊したんじゃないかと思つたと言つた。また別のワークで、参加者がこんなことを言つた。私が最初に入ってきたとき「高木ブー」（いてもいなくても同じようなトロい人物と言うニュアンスらしい）かと思つたら、ワークをすすめていくうちにそうではないことが分かつた——あなたは、自分のルックスをわざとケアーしてないんじゃないか、その服は似合うと思つて選んでいるのか？（私はワークにはよれよれのコートを着ていつていた）まるで、わざと冴えない格好で目立たないようにしておいて、後になってあなたが持っているいろんなものをどつと出して周囲をびっくりさせることを楽しんでるんじゃないか？

そういわれてみると、私が幼児から繰り返していた対人関係のパターンが、衣装にも集約されているような気がした。

ともあれ、ワークをやる度に、そこでの所作や表現はプロセスに任せきつており、あまり他者の視線は意識していないにもかかわらず、他者からは、印象的なシーンとして記憶されることがたびたびあつた。

私の自らの身体に対する見方は、そういうフィードバックを受ける度に変化したのである。自分の身体の実現可能性ということが、次第に確信になっていった。自分の身体は表

現の媒体となりうる。それは私が自分から最も遠いものとしていた可能性ではなかったか。私は自分の精神が繰り出す言語についてはいささかの信をおいていたものの、身体は見せるに値しないものとしてその背後に隠し続けたのではないだろうか。

十三、演劇ワークショップ

養護学校で仮面を用いて即興劇作りを生徒に指導していた高崎明氏を沖縄に呼んでワークショップを行った。前後に高崎氏と交わした会話はなかなか啓発的だった。

私は、「身体の歪みを発見する」という演劇的ワークよりも、「歪んでいる身体でもある瞬間には魅力的でありうる」ことを発見するワークの方が意味が深いのではないかと、ということをしきりに言っていた。歪みをそのまま輝かせることこそ、演劇や変身の虚構の力ではないのか。（その極限が唐十郎の状況劇場であつた）演ずることのなかにある、遊び性の素朴な歓びをこそ利用すべきではないか。

高崎氏から示唆されたのは、「上演」というイベントが持つ力であつた。参加者相互の発表会だけでは大きなものが欠ける。制作の

プロセスに関わらなかった観客の視線に身をさらすことによって、大きく変化する人もいる——そんな話が興味深かった。

十四、風姿花伝

身体表現をめぐるさまざまな体験が、十年以上前に読んだ古めかしい書物の記憶へと私を呼び戻した。世阿弥。風姿花伝。

すがたのはな。なんという奇妙な概念であろう。しかし、私には、これ以上腑に落ちる言葉はない。ゲシュタルトであれ、仮面のワークであれ、人の所作の流れの中に鮮やかな存在感を与える瞬間があるのである。それは、人格の中のかなかと、虚構が独特に一致して、身体の新たな層が開示されるときなのである。このきらめきを捉えようとして世阿弥は花という隠喩を探り当てた。舞台上演技者が実に生き生きとしたアウラをまとうとき、その身体は花である。身体は花であるその時に、それまで生きられなかった可能性を虚構の空間において成就するのである。

駒込先生が私の姿を「祈っている」という層で発見したとき、彼は虚構の中で私の身体が花であることを見出したのである。花であることを見出された私の身体は、その歴史を

変えた。

十五、松延博メソッド

スライドを写して、仮面を被って踊った。

言葉は邪魔だと感じていた自分に気がついて私は驚いた。私の身体はみすぼらしく、ただ言葉を用いたときのみ表現媒体でありうるにすぎないと私は永く信じていたのではないか。

私は、永いこと抱いていた自分の身体イメージからなんと遠くはなれていたことだろう。私の基底には、既に、私の身体は表現媒体でありうる——つまり、他者に美的ななかを伝え得るものであるという揺るぎない確信があった。身体が他者の視線になにかを表現していると知ったとき、自我が自らに対して抱く概念は変容するのである。私は、私の身体が歪んでいることを指摘してくれた人達にはなく、私の身体が花である瞬間を発見してくれたすべての人々に感謝の思いを送りたい。

十六、クラウニング

リッキー・リビングストンの独自のゲシュタルト・ワーク「クラウニング」を受けた。道化の粉飾でグループの面前に立つのだが、要求されるのは、自己イメージをコントロールして他人に受け入れられるようにするのはなく、他者の視線にさらされながら、なおも自分自身であり続けることであった。自分自身であり続けることを妨害しさえしなければ、誰もがマジカルな存在でありうる——クラウニングのうたい文句を私は「誰もが花でありうる」と書き換える。

傲慢のパワーを披露することで他者に印象を与えようとすることはやめようと私は思った。素顔のままで、身体そのままで、私の身体は他人から受け入れられ楽しまれるものであるという静かな確信が私を満たしていた。私は花飾りのかわいらしい帽子を被った。子ブタのぬいぐるみを持った。私は私を他者にさらした。私はただ立って、ぬいぐるみを愛撫し、ほおずりした。

その時、私は花であった。花であると同時に自分自身であった。

了

出 会 い 百 選 ⑫

童は『ふざけ』に本質あり……平井信義さん

畠 瀬 直 子



「出会い」というのも妙なものである、お会いしてから何十年もたってから味が出てくる類の出会いもあるようだ。みなさんは、そんな体験をもっておられるかしらん？

平井先生の授業で、「夜尿児のお母さんには、『毎朝笑顔で布団を干し、気にしないで、楽しくしているように』と話している」と聞いた時、こんなだらけた話を聞くためにわざわざお茶の水女子大学までやってきたんじゃないと愕然とした。十九才だったと思う。今、「学校に行く気力でない時は、おもいきりだらだらしてね。元気が出たら、のんびり家になんか居られないんだから」と子供を励ましてる自分がいる。ひょっとして、反感を感じるっていうのは、深く感じ考えるってことなのだろうか。深く刻印することなのだろうか。

この世のあらゆるストレスがデパートのようにならって緊張が異常に高まってしまった日本国のまん中で、不安に揺れるお母さん達を明るく励ます恩師を見ると、こころの底からほのぼのとした暖かさが立ち昇ってくる。

日本の暗さをつき破る楽天主義

もう一年ほどになるが、大津市の青年会議所メンバーの若いパパが平井先生をお呼びして講演会をすると知らせてくれた。彼の話しから、先生の「毎朝笑顔で汚れた布団を干す」あの楽天主義がすごく大きな未来を開く光りになっていることが伝わってきた。

本当に、たいせつなのは光りなんだ。

パンドラの箱から世の中の厄のもとが全部逃げ出して、

世も終わりに見えたとき、底からのそっと出てきたのは「希望」だった。

ブラジルに地球人が集う目的のひとつは、太陽光を危険な光りにしないこと。

「出会いの広場」の目的も光りかもしれない。

かの大津のパパは、明るく登校拒否児を見守る会を作った。光のパワーはやっぱりすごい。専門家にすべてをまかせろ式の発想法では、どうにもならない所まで来た日本の現状を、明るい曇りのない眼で見つめ、しかも打ちのめされないなんて、楽天主義者にしかで

きない相談だと思う。

“まじめ”にするのが苦手な子供だった

まじめにピシッとするのが苦手な子供って、おおいと思う。わが家の子供もそうだった。でも、儀式っぽいことの多いこの国で困らないようにと、時にはお尻をひっぱたいて慣らしてしまった。

自閉症児は、絶対に、ピシッとする方法に慣れない。そんな訓練したら、異常にビクビクして、笑顔が二十四時間もどらなくなる。

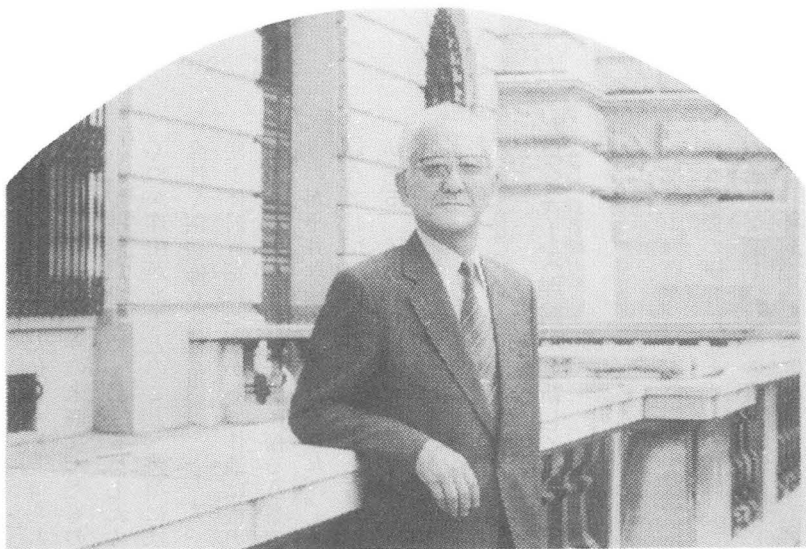
先生のお父さんは厳格だったので、大正デモクラシーの残り香がある小学校で自由を体験して育った平井少年は苦痛の極みだったようだ。「時間について、父は非常に厳格であった。父と待ちあわせをするときに、私が一分おくれても、父は待っていなかった。たとえば、映画などへ父といっしょに行く約束になっていたときなど、待ちあわせの時間におくれたために連れていってもらえなくなり、泣く泣く家に帰ったことが何回かある。父が帰ってくると、かならず叱られた。そのたびにいわれたことの一つは、『目上のものを待

たせる法があるか』であり、もうひとつは、『時間はぜったいにおろそかにしてはならない』ということであった。」これを読んで、ちょっと、びっくりしませんでしたか？

封建主義・儒教主義にもとづく厳格なしつけに、一体何割りくらいの子供が適応できたのだろう。先生のお母さんは、自分の考えをお持ちの方だったと見え、「お父さんが……と言ったでしょ」は全くなくて、平井少年は多忙で家にいない父のおかげで（？）自由を満喫したようだ。ただ、目上の男性に対する緊張感は、目上とよべる人々が世を去るまで続いたとのこと。体験の影響力って、すごい！

さて、平井理論からの指摘をひとつ。「人間の心の解明にあたって、心理学を学んではいきたら、いまのように自由に発想することができなかったのではないかと思うことがたびたびある。それは、子どもの心の本質は直感的に理解する必要がある、とくに子どもといっしょに楽しく遊ぶ場合には、直観がますます重要性を増すからである。」

先生はセレモニー恐怖症といえる面があったようだ。学校で儀式があつて、校長が教育勅語を白手袋でうやうやしく捧げ、講堂の壇上に登るシーンを見ると、笑いだしそうにな



● 平井先生

るのである。これを懸命にこらえる苦痛は大変だったとのこと。

うーん。心理学をわすれ、子どもの心を直観的に理解して、あまりに暗い現状を変えたくなってきた。

“しつけ無用論”

ここ十数年、父親は厳格に叱り切る役割が大切で、弱い叱らない父親を持つと登校拒否になりやすいという説が巷に流れている。児童相談所で「子どもを叱るように」と指導され、清水の舞台から飛び降りる気持ちで子供を殴り、ますます関係が悪化したケースなどが実際に存在する。

信頼関係構築から心の安定を計る方針の私は困惑し続けたものだ。著名な心理学者の意見だといわれると、田舎大学にいる私は物が言えなくなる。ところが、平井理論は“しつけ無用”ときた！ともかく、大大大賛成！

先生の母方のおじいさんが敬虔な仏教信者で、まったく叱ることのない方だったのだそう。ひとつの理論にも、命の歴史のながい歩みが息づいているのがわかる。叱らない

ことを、母性社会の病理などとするのは本当にやめにしたい。だいたい、そんなの女性蔑視につながるもの。私達、日本中にある柔らかな微笑みをたたえた仏さんに見守られて文化史を刻んできた人々の末裔なんだから。

しつけ無用をわめく必要を感じたのは、いくつか理由があるとのこと。鋳型にはめて自発性や創造性発達を阻害してしまつては大変！体罰肯定につながる。体罰は権力的で体力のある大人が弱い子供に振るう暴力だというのが平井理論のようだ。また、「しつけ」という名目で子供の自由を拘束してしまふ恐れがある。子供から自由を奪わないことこそ、先生のいのちの要なんだと思う。

ロジャーズ理論が、新しく生きるヒント

世の中の研究者達を概観して、六十五才以後は過去の研究にまとまりをつけることに用いよう、新しい研究の展開は若い人にまかせようと考えていた先生は、ロジャーズの「肉体的な衰えを感じ」つつも「新しい企画のために好奇心を燃やす」姿に共鳴し、変わったとのこと。

アフター・六五の生き方でロジャーズに共鳴する第一は、「サポート・グループ」。元気に新しくチャレンジするには、支えてくれるグループが必要ですつて。確かに、孤独な厳しい精進は、一生続けられるものでないに違いない。いま、孤独とむきあつてがんばっている人には余計なことだろうが、いつか・どこかの時点から人々のなかで支援しあう関係にはいることは、必要だと思う。

第二は、若者達が新しく創りだそうとしているパラダイムへの共感。どういうことかと言うと、人間という尺度ではかるほうがいい／質素で、物を大切にし、再利用を計り、捨てない生き方がいい／外面よりも内面生活が中心、ということ。この三本柱を大切にすることである。

第三は、「安全や確実性に退屈する」（元氣盛りの子供を持つ母としては、心臓がキューンと痛くなります）、「おなじことを繰り返すことができない」、「試みることによって学びとれる」である。

つまるところ、外面からの見かけと違って、年をとつても内面のわくわくした情緒性は、人間かなり共通なのだろうが。

*

老人発達論

こうして、ロジャーズに触れ、鎌田東二氏の翁童論にヒントを得て、“老人発達論”を展開されようとしている。これには、心の底から拍手を送りたい。

どうがんばっても、私の年齢では考えるほどわすべりしてしまつて、心もとなない思いしか出てこない。そして心の底では、“親の世代は戦後の貧しさのなかで私達を守ってくれたのだから、心をこめて見送りたい”と思ひさだめ、“でも、私は孤独に耐える力を持ちたい。『生めよ増やせよ』された世代だし、自分達はいっぱい子供を生んでないので、これまでのお年寄りのイメージでいたら、社会が疲労してしまう”と考えている。

北欧のお年寄りが、暗い長い冬を依存しないで切り抜ける姿に接すると、ほんとうに感心するが、私にその力がわいてくるのか心配だ。

老人が発達する。体は衰えても、いままでにない形で発達する。なんて素敵な発想だろう。

- 1 彼岸と此岸に相互に橋架けるもの。
- 2 民族社会のストレンジジャーであり、ストレンジ・ストーリーを語るもの。
- 3 繰り返しを厭わず、遊びに満ちるもの。
- 4 異界の時間に出没し、変化し、巧まざるユーモアをもつて風の笑いとともに来たり、去るもの。
- 5 全宇宙を包むひとつらなりの巻物の開閉。開けば翁、巻けば童。
- 6 道の自然学、魂のエティカ（道義）に静かに導く船。
- 7 非記憶の場所。

ちょっと難しいな。この七テーマが老人発達学のアウトラインである。（子ども期と老年期／太郎次郎社）なんだか、二十一世紀になってから、じんわりとその味がわかって来そうな気がする。いまは、まだ分からない。あれっ、十九才の時みたい！

ますますの、御発展を！



・はたせなおこ
滋賀大学保健管理センター

I・T・P. での一学期

——東洋と西洋の出会い——

高尾 浩

夢

こんな夢を見た。囲碁の学校で沢山の人が碁盤を並べて碁を打っている。私は、そこで碁の練習と理論の研究をしていた。

この夢は、ITP（トランスパーソナル心理学研究所、Institute of Transpersonal Psychology）に行くかどうか迷っていた私に結論を出してくれた。

私は、ITPに行きたいと考えて二年間、準備した。ITPで学んだ人に聞いたのだが、そこでは日常の中で思いがけないことが起り、グループとしての深い関わりを体験できるということだった。文化と人種の違う人々とそういう体験することに、私は興味をもった。

ところが、入学許可を受けとってから、迷い始めたのだ。ITPは、体験を重視すると聞いていたが、大学院だから、知的作業も多いだろう。しかし、私は頭をあまり使いたくないと思った。私は、かつて、臨床心理に出会う前に、哲学に熱中したことがあったが、その理論は実生活に役立たなかった。その反動で、私は心理学の分野では、エンカウンターグループ、カウンセリング、ゲシュタルトセラピーと、体験だけを求めている。

一九九一年七月、オレゴンでのアーノルド・ミンデルのワークショップを終え、サンフランシスコに帰った私は、ITPに行くのかどうかの結論を出さねばならなかった。私はどうすべきか、夢に聞くことにした。瞑想し、この先どうしたらよいかを示してくれるよう

夢に頼んで眠った。そして、見たのが碁の学校の夢だった。夢は、私に理論と体験の双方が必要だと告げている。私は、それに従うことにした。以下に記すのは、一九九一年、秋学期を終ったばかりの、私のITPの印象とその紹介である。

カリキュラム

ITPのカリキュラムは、六つの部門から構成されている。

(1) 理論と研究方法

トランスパーソナル心理学入門、ユング心理学、パーソナリティ理論、研究方法と論文の書き方……

(2) 心理学療法の理論と実習

エンカウンターグループ、サイコセラピーの技法、サイコシンセシス、サイコドラマ……

(3) 瞑想

禅、スーフィズム、ヨガ、キリスト教、夢……

(4) ボディワーク

合気道、太極拳、ライヒアン・ブレストワーク、ホロトロピックブレスワーク、ハタヨガ、フェルデンクライス……

(5) 社会や組織との関わり

トランスパーソナル心理学と社会システム理論とグループダイナミックス

(6) 創造性、表現

絵を描いたり、様々な素材を使つての自己表現をする。

カリキュラムは、知性、情緒、身体、表現、社会、瞑想の六つの部門を網羅している。考え方としては理想的だが、学生にとっては忙しい。マスターコースは、これを三年間で学ぶが、Ph.Dコースは、これを二年間で済ませ、三年目からは、スーパーバイズを受けて、実習と研究をする。

ジェームズ・ファディマン（ITP創設者のひとり）は、トランスパーソナル心理学の教育では、ITPが世界の最先端であると自負している。ここでは、西洋の心理学と東洋の神秘主義の伝統を結合しようとしている。

ギリシャ以来、理性を開拓し、知的自我による身体と自然の支配、コントロールを深めてきた西欧社会に生れた心理学が、身体、自然と知性を結合し、神秘主義を神秘ではなく、人間にとって、必然的な成長の道として解明し、受け入れようとしている。ITPは、そういう流れの中にある。

学生資格と学生

Ph.Dコース、マスターコース、通信コースの三つのコースがある。Ph.Dコースは、マスターを修了していなくても、四年制の大学を出て、一定の心理学の単位を修了していれば入れる。入学試験はない。自分の入学希望理由、今までの体験などを、数頁に書いて提出すること、及び面接がある。面接をするのは教師ではなく、学生の構成する入学者選考委員会である。

過去にどのようなスピリチュアルな体験をしているか、どのようなセラピー体験を持つかが、問われる。瞑想とボディワークの体験は重視される。

Ph.Dコースは、二年間は、週に四日間一日に五、六時間の授業がある。十週間が一学期で、一年に三学期である。六、八月の三ヶ月は夏休みになる。一学年、一クラス、二五名で出発する。私のクラスは三名やめたので現

在二三名。二年生は、現在は、十九名。

マスターコースは、夜間で、週二日、一日三時間の授業で、三年間で修了できる。Ph.Dコースは、最短の場合、四年間で修了できる。その最初の二年間でマスターの資格を取ることは、できる。しかし、四年間でPh.Dを終了した人は、今までにいない。平均六年半位かかっているそうである。マスターの資格とカルフォルニア州のセラピストの免許をとって、開業する人もいる。

私のクラスには、すでにその免許を持つている人もいる。ITPに来る前の、私のクラスの人々の経歴は、セラピストやボディワーカーが半分位、他に教師、ビジネスマン、公務員、主婦などである。

インド人のグルの瞑想センターで何年も瞑想したという人、クンダリーニエネルギーが昇った人、人の心が読めてしまう人、もとカトリックの尼さんだった人など、特別にスピリチュアルな世界に深くかかわっていた人もある。クラスの半分位の人は、ソウルトラベル（自分の意識がからだから出てしまう体験）をしたことがある。臨死体験をした人、夢の中でいつも意識のある人などもある。私は、セラピーは長く学んでいるが、瞑想は始めたばかりで、スピリチュアルな世界はこれからの課題になりつつある所である。逆に、スピリチュアルな世界の経験は多いが、セラ

ピーをこれからの課題にしようとする人もいる。学生の年令は、一番若い人が二八才、上は六十才位で、平均は四十代である。出身地はニューヨークやフロリダ、ハワイ、テキサスなど全米から集っている。外国人は、ドイツ人一名、フランス人一名、日本人一名、カナダ人二名の、五人である。

ＩＴＰでの理論と体験

ロバート・フレイジャーとジェームズ・ファディマンの共著による「自己成長の基礎知識」(春秋社刊)という本がある。二人がこの本を共著したことが、ＩＴＰを設立するきっかけになったそうである。この本は、ＩＴＰの性格をよく示している。これはパーソナリティ理論のクラスで教科書に使われるし、アメリカの他の大学でもかなり使われている。その特徴は、精神分析から始って、心理学と瞑想法が同列に扱われていることである。十一の心理学、フロイト、ユング、アドラー、ホーナイ、エリクソン、ライヒ、パールズ、ウィリアム・ジェイムス、スキナー、ロジャース、マズローと、ヨガ、禅、スーフィズムが心理学の一部門として、同列に扱われている。これは、東洋と西洋が合流しているＩＴＰの性格を示している。

この本では宗教的瞑想法を心理学の延長と

して、学問的に扱い、それを我々が超正常(自我を超える)になるためのセラピーの技法として扱っている。トランスパーソナルな世界は、カール・ロジャースや、アブラハム・マズローに接続する自然な次の段階として扱われている。

ＩＴＰでは、殆んどどのクラスが短い瞑想で始まり、トランスパーソナルな世界は特別なものではなく、日常生活の一部という雰囲気がある。先生達は、禅、ヨーガ、チベット仏教、スーフィズム、キリスト教など様々な瞑想法を修業していて、あらゆる瞑想法が、平等に取扱われ、かつ体験的に紹介される。学生は、その中から自分に合うものを選んで、自分で深く追求したり、学外で指導者を見つけたりする。

もうひとつのこの本の特徴は、各章ごとに練習課題があつて、それぞれのセラピーを自分で体験できるようになっていることである。これもＩＴＰの性格を示している。授業の中で短いエクササイズをして、授業を単なる理論ではなく、体験的に学ぶということは、多々ある。しかしそれは、体験的な理論の紹介であつて、理論の比重の方がより大きい。様々なエクササイズは、その体験のふり返りを書き、体験を理論的構築に使うように求められることが多い。これがＩＴＰにおける体験の取り扱い方であるといえる。まるごと体

験に比重をかけるのは、エンカウンターグループ、合気道、太極拳、および、一学期に一回ある土、日のワークショップだけで、他は、理論が中心である。読書と討論、学期末に出す各科目ごとのまとめのペーパーの占める割合は大きい。多様なセラピーを、授業で体験できるが、ほんとうに、どれかを深めることはむづかしい。そのためにはどれかを選んで、外でトレーニングを受けることが勧められる。

「今、ここで」の風にふれて

学校の建物は、カリフォルニア州メンロパークにある教会の施設を間借りしているの
で、庭は広いが、建物は狭く、特別な瞑想室はない。現在、転居先を探している。

以下に主要な先生達を紹介する。ジェームズ・ファディマンとロバート・フレイジャーが、ＩＴＰの設立者である。二人はスーフィー教徒である。ロバート・フレイジャーは、ヨガ、禅、合気道の修業もしたことがある。ドワイト・ジュディは、キリスト教の牧師である。キリスト教の中の神秘主義の伝統に詳しく、その瞑想法を教える。アンジ・エリアンは、スペインのバスケット出身の人。父親は、シャーマンだった人で、彼女自身もシャーマンとしての訓練をうけている。アー



- 正面の建物がI.T.P.の校舎外観です。これの全部ではなく、 $\frac{2}{3}$ くらいを借りていて、残りは協会で使っています。



- サイコドラマ（週末ワークショップ）のクラス。この部屋は道場で、合気道の練習もここです。後の額には「合気道」と漢字で書いてあります。

サー・ヘスティングスは、チベット仏教の修業をしていて、タントラに詳しい。ジル・メリックは、ヨガの修業をしている。以上の主要な先生達は、瞑想者であり、免許をもったセラピストでもある。しかし、ITPで学生が接するのは、学者としての面が主である。

週に一回、二時間のエンカウンターグループがあって、必修である。これは二年間続く。学生は、二年間、殆んどどのクラスを共に過ごす、このエンカウンターグループの時間は、それが最も濃くなる時である。

日本のエンカウンターグループとの違いは沈黙が殆んどないということである。日本では三十分を越える沈黙があったりするのだが、そういうことは一度もなかった。それは、アーノルド・ミンデルのワークショップでも、そうだった。そのワークショップに集っていたのは、約二百名で、殆んどがセラピストだったが、小グループでも全体集会でも沈黙の時というのはなかった。ITPの学生は、平均的なアメリカ人とは異なる価値観をもつ人々が集っているが、自己表現という点ではアメリカ的なだろうと推測している。もうひとつ感じたのは、自分のテリトリーに敏感だということである。IのかわりにWeと誰かが言くと、異議申立てが、何回か起きた。また、小さなことで、誰かが、「それでは皆さん、一緒にこうしましょう」と世話をやこう

とすると、それも押しつけと、拒否する者が、多くいた。多分、日本のなら、ご苦労さんですと、感謝されるようなことが、押しつけと取られるらしい。もっとも、世話をやこうとしたのもアメリカ人だから、全部の人が、テリトリーに敏感ではないが、そういう人は、少数者であるらしい。

英語に不自由なため、授業が始まってから緊張したり、みじめな思いをすることの多かった私にとって、エンカウンターグループはエネルギー供給の時間だった。少し早口で話されると、内容が聞きとれなくなるが、声、表情、からだの動きを観察していれば、かえって、ほんとうに起きていることが分かる。クラスメートも、その時間は、感情を出すので、実に興味深かった。ともすれば、英語の壁に押しつぶされそうになる私だったが、このグループの時間の感情次元の交流から、私のエネルギーは、活性化した。

週に四時間、合気道のクラスがある。これも必修。ITPの創設者のひとりで、現在も教授であるロバート・フレイジャーは、かつて二年間、日本に留学したことがあり、植芝盛平から、合気道を習い、合気道五段である。彼が植芝盛平のパーソナリティをどう心理学的に規定できるかと考えたことも、トランスパーソナル心理学に移行する契機であったという。私は、日本で、弓道はやったことがあるが、

格闘技は、知らなかった。どれも似たようなものだろうと思っていた。しかし、フレイジャーは合気道は格闘技ではないという。それは愛であり、相手と気を合わせることだという。

練習は、いつもスローモーションカメラを回すように、ゆっくりと動きながら行う。強調されるのは、相手の気をうけとり自分の気と合わせ、外に伸ばしていくことと、一連の動きの中で、この気の流れと、自分のセンサー（ヘソの少し下、第二チャクラのあたり）をいつも、意識していることである。

合気道は、だから、私にとっては、武道というよりも、相手と自分の動きの中で、自分の意識を、今、ここで起っていることに保ち続ける訓練として役立つし、面白い。私は、セラピーの時、クライエントに起っていることと、自分に起っていることの双方に気づき、それをセラピーに使うようにしている。しかし、他の日常生活で、今、ここで起ることに、気づきを保つことは難しい。合気道は、今、ここでの気づきを日常生活に拡げるための訓練として役立つし、セラピストのあり方の練習としても役立つ。

選択科目では、禅を選んだ。他にヨガ、スフィズム、夢のクラスがあった。授業が始まると忙しくて、瞑想する時間が充分とれなかった。ので、授業での瞑想は貴重だった。先生は、アメリカ人で、サンフランシスコ禅セ

ンターを設立した鈴木俊隆の弟子だった人。頭を丸めていて、表情も山寺の和尚さんという感じの人で、目の色を除けば、日本人と思ってしまう。

禅には、何か日本的な本質があつて、長く修業すると、外国人をも日本人のように感じさせるようだ。

鈴木俊隆の「初心禅心」は、力強い本だった。禅は、瞑想ではない、今、ここで、自己の仏性を表現することであるという。永遠なるものは、将来の悟りや、過去の体験としてあるのではなく、今、ここに、いつも起りつつある。私は、それを受け取りさえすればよい。私がどこにも行かなければ、それは、いつも私と共にある。

実際には、私は、今、ここからさまよい出て、過去や未来について、とりとめもなく考えていることが多い。合気道に続き禅でもまた、今、ここでの、自己の周囲への没入と気づきということに出会った。今、ここに生きるということとは、ゲシュタルトセラピーで学んだが、その時はことばだけが残り、自分の焦点は他の問題にあった。ITPに来て、様々な角度から「今、ここで」が、私の前に浮上してきはじめた。

東洋と西洋の出会い

心理療法は、西洋の科学から生まれた。その目標は、自己表現である。心理療法で、セラピストはクライエントが健全で独立した強い自我をつくるのを助けようとしている。

東洋の宗教的伝統の目標は、自我を超えることである。自我を超える時、宇宙との一体感を体験するという。強い自我を理想とする西洋と、それを超えることを理想とする東洋は、対立しているように見える。しかし、西洋の心理学と東洋の宗教的伝統は、相互補完的に連続している面がある。それは三つの視点から言える。

第一に、自我を超えるには、強い確立された自我を必要とする。人類の歴史においても、仏陀や老子等が登場したのは、二千五百年前頃に集中しているが、それは、人類がその頃までに独立した自我を経験するようになったことを前提としている。これは、個人の精神的成長においても再現される必要がある。

第二に、自我を超えるためには、無執着がひとつの前提になっている。そして、又、心理療法の目標である自己実現は、結果として無執着を達成するものである。いきなり、瞑想から始めるのが禅などの方法だが、アブラハム・マズローも言うように、人は、様々な階層的欲求をもっており、低次のものを満たされるとより高次のものが出て来るというのが自然であると思う。無執着とか超越的なものへの欲求は、高次のものであり、いきなりそれから始めることも可能だが、多くの人にとっては難しいであろう。心理療法は、そのために、科学的態度で、各人に合った合理的で有効な方法を開発している。

第三に、自我を超えるということは、結果は、自我の消滅だが、自我の境界線の変更でもある。心理療法が成功する時起っていることも、クライエントが、自分の影を統合し自我の境界を変更し、拡げることである。この自我による自我の境界の変更は、今もあるものに何かをつけ足すというのではなく、脱皮に似ている。それは、ひとつの死と新たな生と考えられる。その意味で、心理療法は、自我の死を小規模に体験している。

こういう視点から、東洋の宗教的伝統に近づく時、神秘と逆説に満ちているように見える東洋の宗教的伝統が、身近なものとなり、より合理的な接近が可能となる。

東洋の宗教的伝統と西洋の心理学は、ひとつに合流できることがわかってきた。それが精神分析、行動療法、人間性心理学に続く第四の心理学と言われるトランスパーソナル心理学の行おうとしていることである。私は、これから、その二つの合流について学ぶことを期待している。

嵐のエンカウンター (3)

団 士 郎

まだ……

泣いているTさんの側にいて、いずれ泣きやむであろう彼女と、この後のセッションにどう参加していくかを考えていた。当然、泣きやむと思っていたのだった。しかし実際には、Tさんの涙は途切れることがなかった。号泣するのでも鳴咽するのでもなく、静かに、しかしとどまることなく涙は流れ続けた。

それを見ていると、昨日、彼女の一言で生き返るまでの間、なすべなく、語りだせば涙がこぼれてしまう自分だったことが思われ、てならなかった。信じられないほどの孤独感や、自分自身の頼りなさに、どうすればいいのか、どうなってしまうのか、あまりにもあ

やふやで不安な、そんな真只中にいるのだらうと思った。ならば今度は私がここに居なくてはならない。そのために昨日のことはあったのだ。本当にここでもエンカウンター・グループは行われていると思った。

それにしてもこの談話室は、廊下を通る人達の目につき過ぎる。場所を移動しようと思った。しかしそれを言いだすまでに、しばらく迷った。考えてみてほしい。泣いている人に、「ちょっと場所を変えて、続きはまたそちらでゆっくり泣いてください」などと言えるものではない。だがそうしなくてはならなかった。

そして清泉寮のテラス、牧場の見えるところに移って、草原を渡ってくる風に吹かれながら、壁にもたれて並んで座った。台風一過、しかしまだ心の中の嵐は止まずだ、なんて思っていた。午後になっても涙はとまらず、それでも少しは元気の回復した彼女に、いろいろな話をした。何を話したのかは覚えていないが、そんなふ

うに時間が過ぎていった。やがて夜には食事もとれるようになり、部屋に戻るといので、どうやらひとやま越したのかなと思った。明日からは、いよいよ合流して……と思っていた。

三日目

翌朝、食堂で姿を見かけなかったが、別に気にならなかった。グループに遅れること二日、やっと揃うことができると、多少の緊張もありながら、午前のセッションの開始を待っていた。

その時、Tさんと同室だという数人の女性が私を呼びに来た。そして彼女が布団から出ないで、泣いているという。一緒に彼女達の部屋に行った。他の人達の布団はすでに部屋のすみになたまれている。部屋の中央に、ひとつだけ残された布団の中でTさんはうずくまっていた。どうしたのかなどとは聞けなかった。「すみません。大丈夫ですから、グループの方に行ってください」と涙を止められなまま彼女は言った。

「もう大丈夫です」昨日から彼女は、何度そう言ったことだろう。人の辛いところは、自分が打ちひしがれて、弱り切っているときにもなお、見舞ってくれる人に気遣いたくなることではあるまいか。十分甘えて、世話になってこそ、回復に向かえるというものだろうか。なかなかそうできないのが、人のもつ優しさでもあるのだろうか。「大丈夫かどうかなんて、決めなくていいから……」と再び、そばで付き合うことになった。

嵐で短縮されたプログラムは明日が最終日。苦勞して集まった人達も、正午過ぎには、それぞれの体験を胸に帰途につく。別れがたい思いや、何か自分が変われそうな予感と共に、夏の清里を去って

ゆく。そう思うと、メンバー一人ひとりのプロセスに同席できなかった残念さと、他方こんな経験は二度とないだろうという重さの両方が、心の中を行き交った。

*

結局その日も一日、私は彼女と一緒にだった。しかし明日のことを考えると、やはり限りある時間の中で、済ませておかねばならないことがあった。それは彼女がこれから日常へ戻る仕事のことだった。今起きている事態は、全く非日常的なものだ。しかし彼女は明日、自分の生活の場に向かって列車に乗りなくてはならない。果たして今、そんなことを考えられる状態だろうか。しばらくいろいろと思案した。しかし決心の末、話題にした。

彼女はこのプログラムに友人と連れ立ってきていた。別のグループで、友人はその人にとつてのE・G・初体験を満喫していた。「どうする？ 帰りは……」と問いかけると、だんだん落ち着いてきていた彼女は、「一人で帰ります。彼女にそう言っで、別々に……」と言った。「大丈夫か？」などとはつもらないことを聞いてしまった。大丈夫であろうと不安だろうと、自分で戻ってもらわなくてはならない。とは言うものの、前夜のスタッフ・ミーティングでは、彼女達の今後のことへの懸念が語られ、帰宅後のフォローアップの在り方も話題になっていたのだった。

旅立ち朝

最終日の朝、彼女が「本当にもう大丈夫です」と涙なしに、決意を込めて言ってくれたので、私はグループに戻ることにした。彼女

は自分の意志で、グループには戻らないと決めた。

短縮されたとは云うものの、四日目になるグループの最終セッションだけに戻るのは、非常に心細かった。私のことなど誰も知らないだろうとか、開始早々にあれだから仕方ないとか、いろいろ自分に言い聞かせたりした。しかしやっぱり、形式だけの同席になるようで、グループの人達がどんな感じを持つだろうかと心配でならなかった。

朝のセッション開始にはまだ早い時間に、久しぶりにあの部屋に行った。戸口を入ったところに、今回の出来事の発端になったA君が足を投げだして座っていた。ちょっと戸惑ったが、「おはよう」と声をかけて、奥に行こうとした。その時、「団さんとは、全然話すチャンスがなかったなあ」と彼が言った。

驚いた。なぜ彼が、私の名前を知っているのか。なぜ話すチャンスがなかったなどというのか、大いにとまどった。何なんだろうと反射的に警戒心が働いたりもした。しかし「本当だね」と返事をして、彼の顔をみたら猛然に嬉しくなった。彼が私を知っている。さらに別の場所で、違った形で、私もこのグループを支えていたことを知っていましたよ団さん！と声をかけてくれている。そう思ったのだ。この彼の一言で、最終セッションだけ合流することについて感じていた私のためらいは吹き飛んでしまった。

グループのみんなが、それぞれの場所に戻る心の準備をはじめている場に、私は安心して同席していた。そしてあらためて、人が人の何によって支えられるのかを、又しても思いがけないところからのメッセージで実感させられていた。

午後になって、参加者達はそれぞれの来た道を、何度も振り返りながら帰途についた。彼女は結局、一度もグループの中には戻ることなく、一人で大阪に帰っていった。あとにファシリテーター・トレーニングを受けていた十人とスタッフの先生達が残った。

エピローグ

あとはそれぞれのグループで起こったことを整理して、各訓練生の心の中の納めるべきところへ納めるのが仕事だった。N先生とOさんと私のチームが、一番変則の総括をすることになったのではないだろうか。なにしろスタッフ共通の経験時間があまりにも少ない。他のグループでは、まず訓練生としてコ・ファシリテーターを経験した感想から語りあう、それが段取りというものだったろう。しかし我々の組は違った。共有できるグループ展開のディテールがなかった。N先生が静かに、語り始めた。

「私達とはとても大変なことを引き受けることになりました。でも仏様は、私達が背負える以上のものを負えとはおっしゃらないと思います。大変でした。でも私達は、出来るかぎりのことを、よくやったと思います」

細部まで記憶しているわけではないが、確かこんな言葉だったと思う。私はそれを聞きながら、清里に自分が何をしに来たのか、やっとわかったと思った。そして判ったからこそ、「二度とこんな目にはあいたくない」と言葉にしたら、また涙が止まらなくなった。大きな声でしゃべり続け、笑いながら涙を流した。

次の日、我々も九日間のプログラムを閉じることになった。まだまだ語り尽くせていない思いが、訓練グループの仲間にも、N先生にもあった。しかしいつか区切りをつけなくてはならない。関東方面、関西方面、車組、列車組、それぞれに分かれて清泉寮をあとにした。そしてその後十年、私は一度もN先生とも、Oさんとも会うことがなかった。



別の時間・別の話

あれから長い時間が過ぎた。遠い昔のことのようにも思えるが、一方で思い出して語り始めると、今も込み上げてくるものに胸が詰まるのも事実である。

手元に一本のカセットテープがある。自筆で『8/6レビュー・セッション』とあるから、私自身が録音したものだ。しかしこのテープの存在を、私は覚えていなかった。ほかの要件で、引き出しを整理していて発見して、はじめてこんなものがあったことを思い出した。あの時のことを、早く忘れたいと思った覚えはないし、こうであってはならないなどと抑圧した覚えもない。なのに偶然見つかったテープを再生してみると、なぜこんなことを忘れてしまっていたのか、こんな思い違いをしていたのかと、心当たりのないことの山だった。

そもそもあのファシリテーター・トレーニングは、私にとってはほとんど未知の人達ばかりとの九日間の合宿生活だった。そんなこともあって、一人になる時間を作る道具として、買ったばかりのウォークマン（録音機能付）を持って行くことにした。テープは『キース・ジャレットのケルン・コンサート』と『来生たかおの最新LP』の二本を選んだ。そしてプログラムに先生達の講義も予定されているので、録音できるように生テープも何本か用意していた。その結果、十年前の8月6日夜の時間が、そのまま冷凍保存されることになった。

それにこんなこともあった。私が持っていた来生たかお「Biography II」を、一緒にコ・ファシリテーターとして組んだ

〇さんは知っていた。そのLPのなかで、彼が一番好きだと言った曲を、私はそれまであまり意識していなかった。♪バラの花の一輪で 心がなごむことがあるなら ほんの君の一言で その日が楽しくなる場合もあるよ 小さな出来事 つみかさねるたび ささやかな絆が生まれてく 優しさはかざりものでもない♪ これが歌詞である。何という不思議。これは私が一人過敏になって反応しているだけではないだろう。本当に一言で、人は人を生かしたり、殺したりできるのだと思った。

さらにこれにはおまけがつく。一人で帰路についたTさんは、一年後、私が仲間と毎年大阪のギャラリーで開いているヒトコマ漫画の展覧会場にやってきた。それから現在まで、ほぼ毎年足を運んできてくれている。そして小学校の教員としての日常のあれこれを、担任をもって張り切っていると、低学年がかわいいとか、いろいろ聞かせてくれる。

そんなTさんに今年、ギャラリーでこの連載のことを伝えて、十年前の出来事の話をした。あれ以来、初めてのことだった。驚いたことに、彼女の記憶は、私がこの連載で書いたよりもずっと曖昧だった。事実関係や前後関係も、私の説明で「ああ、そうだったわ」とやっと思い出すことが多かった。しかし来生たかおのあの歌のことは覚えていた。そしてテープを持っているという。「エーッ」と驚きの声を上げると、「〇さんに貰ったんです」という。そこで、「それは勘違いではないかな」と、テープのいきさつの話をした。すると彼女は、「私あの時、〇さんに憧れていたから、そう思ったのかな」と言って笑った。私はなんだか少しガッカリしてしまった。でもこれって、ちょっといい話だなとも思った。これが嵐の後、十年の結末である。

この連載をさせてもらったことで思いがけず、過去の体験を何度も何度も振り返る機会を得た。考えてみると、PCAプログラム（伊香保）での初めてのグループ体験以来、E・G・からは何時もいいものばかりを貰ってきた。E・G・に出かけることがなくなっただけでも、E・G・と出会ったことは私の大切な財産である。

そして更に、あの次の年の初夏、埼玉県・嵐山で行われた、カー・ロジャーズさんのワークショップに私は参加した。しかし今思うと、国立婦人教育会館での六日間は、ロジャーズさんと同じ時間、同じ空間にいながら、いつも遠くから見つめていた。そして他のことばかりしていたような気がする。それには多少、私などよりも、ずっとロジャーズさんのことを大切に思っていた人達が、近くに居られて当然と思う遠慮があった。しかしパーティの席で、木村易さんが静かに語った「自分の青春にとって、カール・ロジャーズとの出会いは、生きる光であった」という言葉には胸をうたれた。そして自分自身を振り返って、そういう出会いを重ねてきたのだろうかと考えたとき、清里のことがうかんだ。ロジャーズさんに会うのではなく、ロジャーズさんを通して私が誰と、いかに出会うかということが問われているのだということが、少し解りはじめていた。そして四年足らず後、ロジャーズさんは亡くなった。そのニュースに触れたとき、あの嵐山プログラムへの参加承諾が、畠瀬先生御夫妻の、前年の夏の私へのご褒美だったのだと思った。

了

*



《書評》

石原文里著『こころは生きている』

ある看護婦とのカウンセリングプロセスに学ぶ、医学書院、一九九二

鈴木正子

本書の由来

看護婦である丘さんは辛い人生を歩んだが、石原氏との面接によって生きる喜びを得、七十歳で死んだ。死を決意したある時、死ぬ前に一度だけ試してみようと、面接という道を選んだのが石原氏との出会いだった。面接の都度自分のテープを聞き、ノートを取り、手記を書く。それが丘さんの生きることとなった。

それから二十年、面接回数は七十数回に及び、大学ノートはダンボール一杯となった。あるときどきと、「どう使って下さっても結構ですよ、先生」。その中わずか八回分の内容からなる。これは単なる手記でも面接記録でもない。カウンセリングという方法に向き合って生きたカウンセラーとクライアントの、闘う姿のドキュメントである。

著者はまえがきに書いている。『丘さん

(クライエントである看護婦―仮名)は、一昨年夏、忽然と逝った。粗原稿の段階で一度閲読していただいていたが、完成された書物を、うつせみの彼女に手渡すことはもはやできない』。そして、著者石原氏もまた本書の完成目前、グループ宿泊先で倒れ、この本を見ることなく逝った。

言葉と関係

私は十数年前、一度だけ石原氏のグループにメンバーとして出たことがある。そのときのことを今もありありと思い出す。

ファシリテーターとしての石原氏は、そのときメンバーの発する言葉を一つ一つ徹底して拘った。それは私の体験した過去のグループのイメージとは随分異なるものであった。私のグループのイメージといえば、「言葉」そのものに拘るのではなく、むしろ言うまま

にゆっくりとどこまでも聴き続け、ある程度言い終わったところで、言葉の向こうからあぶり出されてくる「その人の言いたいこと」に耳を傾けてくれるファシリテーターというイメージがあったので、私は石原氏に異論を唱えた。私はさほど激しく言ったつもりはなかったが「君のように、私の方法に批判してきたのは初めてだ。言葉に拘らなければ、いったい俺はどうすればいいのだ」と、そのとき畳の上に大の字になり、しばしファシリテーター役を降りてしまった。そのグループは、最後までメンバーが二つに割れ、コミュニケーションの時間も解散するまで、大議論になった。

以来私は自分の方法を追求し、結果として石原氏のグループからは遠ざかったが、彼が何をしたかったか確かめられないままに、「関係における言葉とは何か」はずっと私の中で残り続けていた。

本書には、まさに彼の方法論が完成された形で取り出され、明確な形を取って構成されている。そしてまた、私もなるほどと納得するところがあった。

本書で示された、石原氏が拘り続けたのは決して「言葉」そのものではない。相手の世界に関し、どうにも確かめたい関心があり、そこから目を離すと獲物が逃げでもするかの

ように、何かを逃がすまいと追いかける。これは「石原氏自身が言葉」となって相手の世界に行っていると言う感じなのである。文字どおり読めば、カウンセラー中心のエゴイズムだと取れなくもない。事実そうした表現で彼は文中このことに触れている。

『私の疑問の解消とは無関係に思える相手の発言を、私は無視してしまみたいです』だが、『その時々私の内部の声に従い、私の疑問を晴らしたい気持ちの強弱に忠実に動く以外、動きようはない』、また、『私には、"クライエントに、気づかせてやろう、教えてやろう、クライエントを救ってやろう、治してやろう" などという類の、つもりも、また、その力もない』と。

クライエントもまた、自分の気持ちがぴたり表現できるまで拘り続け、ピタッと「そのこと」を捕らえて、変化して行っている。

私はいわゆる「言葉」のやり取りを問題とするのは単なる「形」に陥り易く、危険だと思っている。ただ、最近そうした古典的とも言えるカウンセリング関係の言葉の検討を、私の周りで目にしなくなったと思っている。

考えてみれば私も、言葉をムダ使いし、厳密な意味では言葉の周辺を聴いてきたのではないかという気さえしている。いま私が論ずるとすればどうだろう。やはり、方法論にお

いて、譲歩はできないだろう。しかし、はるかに、石原氏の方法も認めて、話し合うことができそうな気がする。お互い、それぞれの方法論とはそういうものだと思う。

ともあれ、文章は美しく、歯切れよく、潔い。あっさりともとまって読み易い。二十年もかわり合い続けた間柄から生まれた、一生の統合としてのこの本を、みなさまぜひご一読いただきたい。

すずき まさこ
●東京国際大学大学院社会学研究科



人間関係研究会について

人間関係研究会は、エンカウンター・グループを中心とした人間関係の改善と促進の方法についての研究と実践を目的として、1970年春に発足しました。この研究会は、人間関係の分野に関心をもつ研究者と実践家が閉鎖性をうち破り、新しい人間関係をもとに組織と集団や個人生活のあり方に、より真実で創造的・建設的なものを求めることを課題としています。人間関係こそは、私たち人間の生き続ける限り、世界・国家・社会を通じての大きな課題であり、障壁・闘争・破滅にらつながらると同時に、成長・建設・福祉への道でもあります。この新しい分野に関心をもたれる方々が、この研究会を利用し、経験と知識を交換しあうことを希望しています。

C S P プログラム

ラホイアでの、ロジャーズの理論と方法による恒例のワークショップが次のように開催される。

●第十六回リビングナウ・ワークショップ

・期間 一九九二年七月十七日～二十四日
・研修費 五百ドル。宿泊費、一日につきシングル五五ドル、ダブル五〇ドル（二食つき）申込金七五ドル。

・申込先 “Living Now”, Center for Studies of the Person, 1125 Torrey Pines Road, LaJolla, California, 92037, U.S.A.

●ラホイア・プログラム

・期間 一九九二年七月二五日～三一日
・研修費 四五〇ドル。宿泊費は、一日につきシングル五五ドル、ダブル四五ドル（朝・昼食、夕軽食こみ）申込金五〇ドル（研修費の一部となる。）

・申込先 The LaJolla Program, 1125 Torrey Pines Road, LaJolla, California

92037, U.S.A. Phone (619) 459-3861,
Fax (619) 789-8272

（畠瀬 稔）

*御案内が遅くなってしまうましたが、来年度の参考にして下さい。

わが国の「集中的グループ経験」と「集団精神療法」に関する文献のリスト

福岡大学の野島一彦氏は、一九八〇年から日本における「集中的グループ経験」と「集団精神療法」に関する文献リストを作成し、その後毎年、追加しております。現在九〇年度までのリストができています。これまでに発表された論文や報告、学会発表が網羅されている貴重な資料です。

ご希望の方は、野島氏までご連絡ください。また、「集中グループ経験」に関する論文を書かれた方は、抜刷りを送付するなど研究にご協力ください。

問い合わせ先

〒814-01 福岡市城南区七隈8-19-1

福岡大学文学部 野島 一彦

☎092-871-6631

『人間中心の教育』No.9発行

「人間中心の教育研究会」は、一九八四年に発足し、毎年一冊の機関誌を発行し、今年六月にはNo.9が出されている。

教師と生徒が協同しながら展開する授業・教育・学習の場を創造しようとする研究・実践報告が掲載されている。

申し込み方法・申し込み先

葉書に〈号数・冊数・郵送先住所氏名〉を書いて、編集部にお申し込み頂くと、郵便振替用紙をお送りします。代金到着しだい、機関誌を発送致します。

*購読申し込み先

（一冊300円＋送料200円）

〒603 京都市北区上賀茂狭間町

22-22 小原義雄方

人間中心の教育編集部

☎075-781-3845

*郵便振替

口座番号 京都3-756644
加入者名 人間中心の教育編集部

*

編集だより



■購読者アンケートのお礼

№14をお送りした時、定期購読されている方に雑誌についての感想などアンケートをお願いしました。約50名の方から回答をいただきました。誌面を借りてお礼申しあげます。結果につきましては、№16号に掲載させていただきます。

■講読申し込み方法

年間講読料（年二回発行）は、一五〇〇円（送料込み）です。№16からお申し込みの方は、郵便振替か現金書留にて編集事務局宛お送りください。

単品購入希望の場合、送料および購入方法は下記バックナンバーと同じです。

■バックナンバーの購入方法

№6、7、8、9、10、11、12、13、14は残部があります。ご希望の方は、各号の合計代金に郵送料を加えた金額を、郵便振替か現金書留にて編集事務局宛お送りください。

郵送料は、一冊まで250円、三冊まで300円、五冊まで350円、八冊まで400円です。

№6（1987年12月発行 500円）

№7（1988年7月発行 600円）

№8（1989年1月発行 600円）

№9（1989年7月発行 600円）

№10（1990年1月発行 600円）

特集…教育とエンカウンター・グループ

№11（1990年7月発行 600円）

特集…私のエンカウンター・グループ観とファシリテーション

№12（1991年1月発行 600円）

人間関係研究会二十周年記念特集号

№13（1991年7月発行 600円）

特集…中堅グループ臨床家の実際

№14（1992年1月発行 600円）

特集…看護とエンカウンター・グループ

グループ

■次号の案内…十六号は平成五年三月発行予定、十一月末が原稿締切です。

E・Gでの体験、研究レポート、本の感想など、各地の活動や会の紹介など、お気軽に編集事務局までお寄せください。

原稿には、お名前の読みや所属等を明記していただけると助かります。

また、本誌についてのご意見・感想もお寄せください。

■お願い…購読者の方で住所を変更された方は御一報下さい。宛先不明の返送がポツポツあります。

■編集後記…又々、お手許にお届けする

のが大幅に遅れてしまい、暑さの中を冷汗ダラダラ流している内にすっかり秋めいた季節。しかし、中身は、かなりの力作ぞろい。ただただ感謝している編集局です。今後とも魅力的な特集の企画を予定していきたいと思っています。

■15号編集委員…木村易・小柳晴生（編集事務担当）小柳欣子

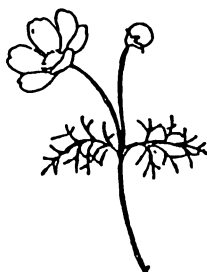
■講読申し込み先…〒761-01 高松市屋島中町383-31507『人間関係研究会編集事務局』小柳晴生

☎0878-4316444

▼郵便振替

振替番号…徳島8136521

加入者名…人間関係研究会編集事務局



人間関係研究会刊行資料

- No. 1 畠瀬 稔 身体接触を伴う人間関係促進の一技法（改訂増補）1972
（価200円 千120円…40g）
- No. 2 小野 修 自分がよみがえった ―エンカウンター・グループへの参加経験―1971
（価200円 千120円…40g）
- No. 3 カール・ロジャーズ1967（小野 修訳） 学校組織の主体的変革のための計画1971
（価200円 千120円…45g）
- No. 4 畠瀬 稔 エンカウンター・グループについて ―来談者中心療法の行動科学的発展―
（「教育の医学」18巻1号より転載）（価200円 千120円…30g）
- No. 5 ジェンドリン&ビービー1968（小野 修訳） 体験グループ ―グループのためのインスト
ラクション―（増補改題）1972 （価200円 千120円…40g）
- No. 6 北島 丕 高校生のためのグループ・カウンセリング1976
（価800円 千240円…180g）
- No. 7 増田 実、東山 紘久、清水 信介 ラ・ホイヤ・プログラムへの参加経験1977
（価200円 千120円…40g）
- No. 8 畠瀬 稔 企業における人間関係の改善について ―エンカウンター・グループ導入―
1979 （価200円 千120円…30g）
- No. 9 渡辺 忠 職場のチーム・ビルディング ―人間中心の組織づくりのために―1985
（価300円 千170円…60g）
- No.10 ナタリー・ロジャーズ（坂川 雅子訳） 母と私 ―鏡の中を覗いて― 『生まれ変わる女』より
（価200円 千120円…35g）
- No.11 小野 修 問題をもつ子どもの親たちのグループ ―臨床家のためのマニュアル―
（価300円 千240円…105g）
- No.12 小柳 晴生 エンカウンター・グループ多数回参加者としての自己分析―参加体験と心的変容
過程― （価300円 千170円…90g）
- 野島 一彦編 わが国の「集中的グループ経験」に関する文献リスト（1970～1980）
〔福岡人間関係研究会資料 No.11〕 （価400円 千170円…60g）
-

申込み先：人間関係研究会事務局

〒145 東京都大田区上池台1-34-26渡辺方

TEL (03) 729-3622 (20時～23時)

ご送金は、郵便振替 東京9-37428まで

（¥1,000以下は、切手可）

ENCOUNTER

出会いの広場 No.15



発行所 人間関係研究会 1992年9月31日
〒145 東京都大田区上池台1-34-26 (渡辺
方) 編集事務局 〒761-01 高松市屋島中
町383-3・507 (小柳方)
印刷 美巧社 高松市多賀町1-8-10

ENCOUNTER

No.15 1992.9

CONTENTS

Special Series : Estimation of CCT Development in Japan : Reports from
symposium at Tenth Annual Meeting of Japan Humanistic Psychology
Association

Meaning of CCT in our Culture.....Naoko Hatase
Carl Rogers in my Internal WorldKazuhiko Nojima
CCT Movement in my experienceHaruo Oyanagi
Workshop with Carl & Natalie in '83Yoshimi Ito
Discussion with FloorsYasushi Kimura

A Transformation of Body Image by Body WorkYo Yahata

Encounter Interview (12)

Joking and Making Fun of Everything is the Essence of Childhood
.....Naoko Hatase

Letter from Over Sea

One Semester Passed at I. T. T.Hiroshi Takao

Retlecting the Stormy Days in Encounter GroupShiro Dan

Book ReviewMasako Suzuki

Information

Edited and Published by

JAPANESE SOCIETY FOR THE PERSON-CENTERED APPROACHES

Central Office : c/o Tadashi Watanabe, 1-34-26, Kamiikedai,
Ohtaku, Tokyo, 145 Japan

Editorial Office : c/o Haruo Oyanagi, 383-3 Suite 507,
Yashima Nakamachi, Takamatsu City, Kagawa Prefecture,
761-01 Japan
